# 弥生の人形浄瑠璃

四ツ橋畔

# 文楽座

# 乍憚口上

うらゝかなる日ざしにもやう〳〵春めかしく相成申候處市中皆々様には愈々御清榮に遊ばされ大慶申上候

陳者當座に於ては引續き太夫三味線人形連中總顔ぞろひにて本格興行を開演仕候處、此度こそは當座秘藏狂言のうちよりお珍らしき配役をもつて折柄の時候にもふさはしきやう花やかさ一段を加え賑々しく御尊覽に供する次第にて何れも腕に縒りをかけ懸命に相勤め可申上方特有の鄕土藝術として古典趣味の豊かなるところを十二分に發揮いたし、せめては報國の一端とも心得一座連中申合はせて精進いたすべく候間何卒此度の好機會をお見落しなく相變らず賑々しく御尊來被下御引立御聲援の程を只管御願申上度御挨拶旁々如斯に御座候

敬白

昭和十五年三月一日

四ツ橋　文樂座　敬白

昭和十五年三月一日初日
初日午後三時開幕
毎日午後四時開幕

・御觀覽料・

一等席　御一名　金三圓三十錢
（一階座席三十錢上り）
二等席　御一名　金一圓三十錢
三等席　御一名　金六十錢
（外に各等入場税一錢）

一等御座席
一等椅子席　は五日前より
**前賣切符發賣致居候**

前賣切符専用電話　南㊱四七壹壹番
一般御用の電話　南㊱三〇三二番
三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

本誌へカットト廣告御掲載希望の向は文樂座宣傳部へ願ひます

# 璃瑠淨形人の生彌

演出總座一形人・線味三・太夫

三月一日初日

初日に限り午後三時開幕

毎日　午後四時開幕

## 雪精化粧の白鷺

豊竹呂太夫
竹本南部太夫
竹本伊達太夫

## 鷺娘の段

豊竹呂太夫
竹本播路太夫
竹本常子太夫
竹本津齊太夫
竹本土佐夫太夫
豊竹英太夫
豊澤新左衛門
鶴澤重造
鶴澤友衛門
豊澤寛若
野澤吉藏
豊澤廣彌
豊澤仙松

## 日吉丸稚櫻

豊竹呂太夫
豊澤新左衛門
竹本南部太夫
鶴澤重造

## 小牧山城中の段

竹本伊達太夫
鶴澤友衛門

## 太平記忠臣講釋

中豊竹和泉太夫
鶴澤叶
豊竹古靱太夫
鶴澤清六

## 喜内住家の段

切

## 壽式三番叟

千歳　竹本文字太夫
翁　竹本大隅太夫
三番叟　竹本伊達太夫
竹本南部太夫

三番叟
竹本相生太夫
竹本織太夫

## 桂川連理柵（長右衛門）

竹本源太夫
竹本文太夫
豊竹富太夫
竹本隅若太夫
豊竹松島太夫
竹本越名太夫
野澤吉彌
野澤八造
鶴澤友三郎
野澤勝芳
鶴澤綱延
鶴澤道八

## 六角堂の段

切

竹本津太夫
鶴澤友次郎
鶴澤清二郎
豊澤竹駒太郎
鶴澤寛治郎
竹本錣太夫

## 帶屋の段

豊竹駒太郎
鶴澤清二郎
竹本錣太夫

## 攝州合邦辻

竹澤團六
竹本織太夫
竹本相生太夫

## 合邦内の段

切

豊竹駒太郎
鶴澤清二郎
竹本錣治郎
鶴澤寛治郎

## 伊達娘戀緋鹿子

竹本文太夫
豊竹富太夫
竹本隅若太夫
豊竹松島太夫
竹本越名太夫
野澤吉彌
野澤八造
鶴澤友三郎
野澤勝芳
鶴澤綱延
鶴澤道八

## 八百屋お七火見櫓の段

# 文樂座

四ッ橋畔

電話南四七壹壹番

## 鷺娘の段

鷺娘　桐竹紋十郎

## 小牧山城中の段

堀尾茂助
女房お義晴
鍛冶屋政
五郎助
悴木下井
早藤太
竹吉
女房松
桐竹紋十郎
桐竹政
桐竹門
桐竹紋
吉田玉幸
吉田玉小兵市
桐竹紋司
桐竹亀造

## 喜内住家の段

内喜
内房女
内房おり
内房ゑ
傾城浮重太郎
實はおはつし娘
悴奴廻し茜屋
猿廻し丹兵衛内儀
桐竹紋太郎
桐竹紋文五郎
桐竹紋太郎
吉田玉蔵
吉田光之助
桐竹門次
吉田文二郎
吉田文之助
吉田兵次

## 壽式三番叟

翁　吉田玉蔵
千歳　吉田榮三郎
三番叟　桐竹紋十郎
三番叟　吉田玉幸

## 六角堂の段

女房おきぬ
丁稚吉
弟長儀兵衛
吉田文五郎
吉田玉藏
吉田榮三

## 帶屋の段

女房おきぬ
母おとせ
親半才
兄右衛門
弟長儀兵衛
丁稚吉
信濃屋お長
若い者半
桐竹紋文五郎
桐竹紋太郎
桐竹政造
桐竹門亀
吉田榮三郎
吉田玉藏

## 合邦内の段

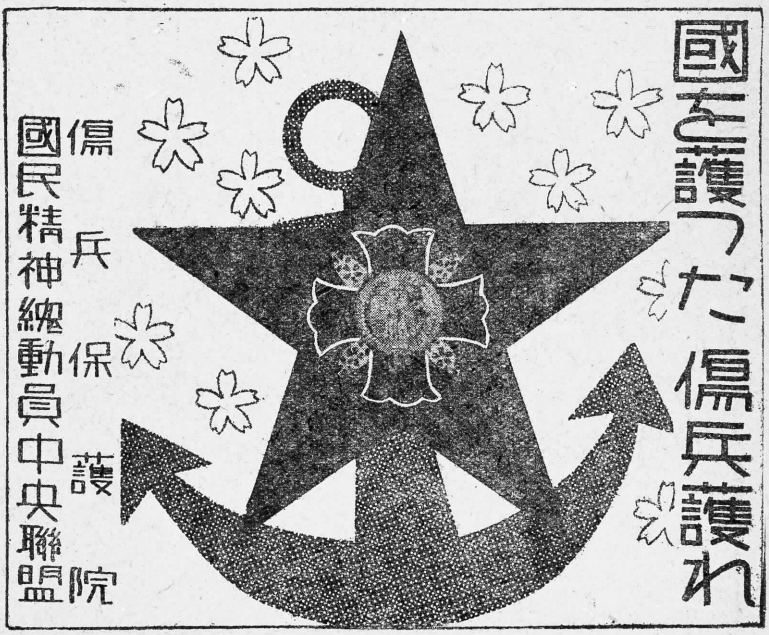
親
合邦
女房御
手入
邦丸
奴平
玉前
合姫
俊德
淺香
桐竹紋十郎
桐竹紋昇
桐竹紋多三郎
吉田榮三
吉田小兵吉
吉田文五郎
吉田玉市
吉田光之助

## 火見櫓の段

八百屋お七
下女おお杉
丁稚彌作
武兵衛
桐竹紋十郎
吉田文枝
吉田竹多

☆三月十日　聖戰下輝し き紀元二千六百年意義深き　陸軍記念日☆

國民精神總動員
盡忠報國
擧國一致
堅忍持久


國を護つた傷兵護れ
傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

# 彌生の人形淨瑠璃

三月一日初日　初日　午後三時開幕
毎日　午後四時開幕

雪精化粧の白鷺　鷺娘の段　四時〇分より四時十分まで（幕間五分）

日吉丸稚櫻　小牧山城中の段　四時十五分より五時〇分まで（幕間十分）

太平記忠臣講釋　喜内住家の段　五時十分より六時廿五分まで（幕間十五分）

壽式三番叟　六時四十分より七時十分まで（幕間十分）

桂川連理柵　長右衛門　六角堂の段　帶屋の段　七時廿分より八時四十五分まで（幕間十分）

攝州合邦辻　合邦内の段　八時五十五分より十時十五分まで（幕間十分）

伊達娘戀緋鹿子　八百屋お七火見櫓の段　十時廿分より十時卅分まで（打出し）

## 鷺娘の段

豊竹呂太夫
（竹本南部太夫
竹本伊達太夫）
竹本播路太夫
竹本常子太夫
竹本津磨太夫
竹本土佐夫太夫
豊竹英太夫
豊澤新左衛門
鶴澤重造
鶴澤友衛門
豊澤寛若
野澤吉藏
豊澤廣彌
豊澤仙松

**人形**

鷺娘　桐竹紋十郎

# 雪精化粧の白鷺

## 鷺娘の段

此度の鷺娘の段は、當文樂座にても上演をみた「花競四季壽」――春は万才、夏は蜑の汐汲、秋は關寺小町冬は鷺娘と四段返へしの風雅な所作事の一齣で、皆樣の御所望により、特にこの鷺娘の段を御覽に入れることにしました。白鷺が娘と化して白無垢姿で水のほとりに現はれて、淋しくたゞずむ……幽艶な情趣に彩られる象徴的な所作事です。

（床本）**鷺娘の段**

忍ぶ山、口舌の種の戀風が吹共傘に雪持つて積る思ひは猶も幾重か重る思ひちらす、外山の雪をくゆらす、炭釜に冬籠りせし一枝を春待顔に初花の咲きかけんとやちら〳〵と梢に宿る白鷺が霜毛を脱いで羽ばたきの雪は花より花多き六つの花びらちら〳〵袂かざしてしぼらしや白雪の〳〵はらへど〳〵降りつもる花と見紛ふ雪や氷を見ながらも袖をかざして立寄ればそれは木々の花切くべて樂しまん酒にいざや遊ぶらん四季目前に有難や、雨土惠みの萬年青草の〳〵盡せぬ眺めぞ樂しけれ。

## 小牧山城中の段

豐澤呂太夫
竹本新左衛門
鶴澤南部太夫
竹澤重造
鶴澤伊達太夫
本友衛門

人形

堀尾茂助　義晴　吉田玉幸
女房　お政　桐竹紋十郎
鍛冶屋　五郎助　桐竹門造
五郎助女房　桐竹政龜
悴　竹松　桐竹紋司
木下藤吉　吉田小兵吉
永井早太　吉田玉市

# 日吉丸稚櫻（ひよしまるおさなざくら）

### 小牧山城中の段

本曲は享和元年（二四六一）十月、大阪北堀江市の側の芝居（座本豊竹時太夫）に上場をみた近松やなぎ、近松加造近松萬壽近松梅枝軒の四人を作者とする全五段續きのもので、數ある太閤記種の一つ。筋は日吉丸の出生より桶狹間の合戰に至る迄を材として、殊に木下藤吉が堀尾茂助の案内で間道から進んで齋藤龍興の居城、稻葉山の城を陷れた事、清正が鍛冶屋の悴であつたが母の緣で秀吉の許に人と成つて武名を顯す事を主題として脚色したもので、この小牧山城中（駒木山）は三段目の切に當り、全篇の山である。尙この外題の讀み方に就いては、邦樂年表などには「ひよしまるわかきのさくら」とあるがこゝでは文樂座の慣例通り「ひよしまるおさなざくら」と假りにして置く。

（床本）　**小牧山城中の段**

〽こそは入りにける、散る花の別れをしばし慰むる、程とや春の名殘とは、しらぬお政が千鳥足、オ、此方の人、此處に居やしやんすか、春の夜寒に酒一つたべ過ぎて、オ、あつやのホ、、、、、私とした事がめつそうな、今迄の源次郎樣とは違ふ、久吉樣の御家來堀尾茂助吉晴樣、侍の女房が、こちの人どうさしやんせとはいはれまい、今から行儀改めて我夫にはお居間へござつて、お休みなされ遊ばしたら、自らは然るべう存じまするとぶ慇懃に、武家の三つ指手はもぢ〳〵、マ、しんきやと寄り

そへば、吉晴は取つて突退け、女房去つた、縁切つた、ェヽ、語るに及ばぬ汝が素性、五郎助殿が手にかけられし、茶碗屋の主源左衛門は我爲に義理ある親、殊には隔つ敵味方、知らぬ中は兎に角も知つては片時も添ふことならず、暇の印は此一腰、叶ぬ縁とあきらめよと、立上る裾引とゞめ、マアマア待つて下さんせ、最前からあらましは、襖の蔭で聞きました、とはいひながら情ない過ぎし逢ふ夜の睦言を、身にしみ〴〵と片時も、思ひ忘るゝ隙もなう、年月隔つ其中に、うつり易きは殿御の心もしや見捨てはなされぬかと、ほんにあらゆる神様や、佛様迄無理いふて、案じ暮した甲斐もなう添はれぬ義理の離別とは、あんまり酷いと取付いて、涙先立つくどきごと、色に引かるゝ吉晴も、屹と心を取直し、悔やんで返らぬ互の縁、重ねて言ふな、聞く耳持たぬぞ、スリヤどの様に申しても、オヽ尋ねに及ばぬ、養父が敵は汝が親、縁につながる茂助にあらず武士の言葉に二言はないといひ放したる理の當然、ハア、はつとお政が突詰し、女心の一筋に、詮方涙なく〳〵も、斯と覺悟は夫の魂抜く手も見せず我と我、咽にがばと突立つれば、驚く茂助、母親も、襖あらはに轉び出で、なら何故の自害じや、早まつた事仕やつたのう、コレ〳〵五郎助殿、娘が自害しましたと、明くる障子の打くつろぎ、竹松膝に抱きかゝへ、我子の最期に目もやらず、煙草すぱ〳〵騒がぬ五郎助、母は詮方なく〳〵も、手負に取付きいたはれば、お政は苦しき顏を上げ、かゝ様こらへて下さんせ、生きて詮ない身の覺悟、思ふ夫に見はなされ冥土の道をうろ〳〵と、嘸や迷ふでござりませう、親に先立つ不孝の罪、赦してたべと手を合し、かこち歎くぞ道理なり、始終聞ゐる五郎助は、手負の方へ見向きもせず、夫齋藤龍興が立籠つたる稲田山の城廓は、凡そ東國第一の名城、一夫是を守らば萬卒破りがたき堅固の要害此城を落すには、瑞龍山の峰づたひ西に聞ゆる瀧の音を心のあてどに谷へ下り、水に隨ひ出づる時は、搦手の水門口敵の油斷は此處一つと、婿の堀尾に餘所ながら、知らす間道聞とる吉晴、敵を攻討つ味方の英氣、ひらくる武運と心の悦び、母は何の氣も付かず、コレ〳〵〳〵五郎助殿氣が違うたか、そりや何ぞ、娘のお政が此様に、コレ自害して死にました〳〵わいの、オヽ男故に命を果す徒(いたず)ら女郎、勘當じや親子でないぞ、

ェ、夫はあんまり胴慾な、可愛い娘が命の際、勘當とは何事ぞ、心づよやと伏し沈めば、五郎助は聲を荒らげ、天地の間に、生あるもの、子を憐まぬものがあらうか、まして人間不愍になうて何とせう、可愛さ餘つて緣を切り婿にしらせし稲田山の間道、イヤサ我子の勘當、堀尾茂助吉晴殿とくと承知あられかしと、夫と知らする五郎助が、恩義を籠めし一言に、胸の底意をあらはせり、一間の中より聲高く、ヤア〳〵齋藤明舜の家臣、加藤忠左衛門清忠殿、木下藤吉改めて對面せんと、名智の一聲鶴の間の、襖左右へ押開かせ、ゆう〳〵然と歩み出で、五郎助に打向ひ、孔子も我子に後れては、思ひの火を胸に焚く、肉身の娘が恩愛に引かれ又二つには齋藤の傾く運を未然に察し、稲田山の間道を敎へたる身の誤りと、古主への言譯に、命を捨つるはあつぱれ〳〵、ホオ、推量の如く、齋藤の恩祿を食ひこんだる此五郎助が、一命を捨てたとは、イヤ隱されな五郎助、五晉はづれし晉聲にて、久吉とくより承知致した、ア御心勞の程察し入ると、大地も見拔く木下が、言葉に五郎助張詰めし、心ゆるんで思はずも、苦しき息をほつとつき、あつぱれ名智の久吉殿、古主の武道を見限りし拙者が覺悟御覽あれと、肌押ぬげば血潮の腹帶、朱に染みなすから紅、見るに驚く手負より、妻はあるにもあられぬ思ひノウ情ない五郎助殿、可愛い我子を先立てゝ、賴りなき身の其上に、こなたに別れて何とせう、命を捨てずとどうぞまあ、仕樣もやうはない事かと、縋り嘆けば竹松が、頑是なき身もおろ〳〵聲、とゝ樣も姉樣も、なぜ一時に死なつしやる、坊も殺して下されと、幼心の孝行心、聞く五郎助は顏ながめ、オ、しほらしい事よういふたな、サア吉晴殿、勘當すれば此五郎助とは、あかの他人の其女、誰に憚る事やあらん女房に持つて下さるか、ホオ、勘當ありし其上は、最早緣なき此お政、未來永々一つ蓮、半座をわけて相待つべし、ア、忝い、あれ聞いたか娘、ではないコリヤ餘所の女中、アイ其お言葉が智識の引導、先立つ此身の經陀羅尼、さいはひながら勿體ない、親の御恩を露程も、送らぬ娘に命を捨て、お情お慈悲の御勘當、餘り冥加恐しい、母樣、弟、吉晴樣、未來は女夫でござんすぞと、せめて別れにしみ〴〵と、顏見て死にたい我夫と、苦しき體をはひ寄つて、じつと見かはす目の中につきぬ、妹春の名

殘の涙、餘所の見る目もいぢらしく何思ひけん五郎助は、娘の首を打落せば、是はとばかり驚く人々、茂助は手負に詰寄つて、血迷はれしか五郎助殿、迚も助らぬ女なれど、首を打たれし所存はいかに、ホヽ、賤しき鍛冶の職人とは成果つれど元は齋藤明舜が家臣、　加藤忠左衛門淸忠血迷ひしとは何のたはごと、サア、木下藤吉殿、齋藤の息女萬代姫が首心を定めて實檢あれと、我子の首を引寄せて、差出す老の五調作り久吉はつと感じ入り、ホオヽ、出かされたり〳〵、命一つを三方四方、切かけられし妙策頓智、久吉違背あるべきか、春長公より仰せを受けし、萬代姫の首、木下藤吉受取つたり、去ながら、義理は今生一旦にて、魂去れば恐れはなし、斯くつらなりしは重緣一家、親子は一世其首に、とくと、名殘を惜しまれよと、情の言葉に五郎助は、子故に迷ふ輪廻の絆こらえ〳〵し悲しさをたもちかねて大聲上げ、始めてわつと伏し轉び、我子の首を抱きしめ、オヽ娘よく死んだ、出かした〳〵〳〵なア、コリヤ徒ら故に命を果す、不孝ものじやと思ふなよ、齋藤の息女、萬代姫樣の御身がはりに、立つて死んだは、古主に對して大忠臣、親は不忠に無殘の最期、子は又忠義に命を果す、果報者、孝行者、極樂淨土の東門を忠臣貞女に命を捨てた、功ものじやと名乘つて通れ息ある中に得心させ殺したいは山々なれど、可愛さ故に勘當といふた、言葉を反古にせまい茂助殿と夫婦にしたさ、じつとこらへてむごたらしう、　花の盛りの娘をば首打落す親の氣は、コリヤどのやうにあらうと思ふ、健氣に死んだ此娘、譽めてやつて下され婿殿、見苦しい死顏を見て、必ず愛想盡かさずとも、思ひ出だして折々は、香花の供養賴みます、こなたが手向の一滴は、娘の爲の善智識、百億萬の御首題を、唱ふるよりも百層倍、嬉しう成佛するわいのと、死ぬる今端の際までも、子に引かさるゝ恩愛の、母も思ひに正體なく、氏も系圖も揃ふたる武士の種とは露知らず、宵に尋ねてあふた時、かゝ樣わしは仕合せもの立派な、殿御持ちました、今から武士の女房じや、髪の結ひやう飾まで、幾千代祝ふ丈長も、心祝ひの友白髮、何をどうしてかうしてと樂しんでゐやつたもの、こんな悲しい身になつて、髮もかたちも要るものか、可愛の娘と死首を、顏に當て身にそへて、歎けば父も諸共に、聲を限りに泣きつくす、恩愛別れの血

の涙、胸に磐石打たるゝ思ひ、こたへかねたる吉晴が、心を察し久吉もしぼる袂も雨車軸、四人の涙谷川へ落込む水の逆落し、山も崩るゝ如くなり、堀尾茂助は涙を拂ひ、恐れ入つたる五郎助殿、忠義の最期遂げられし上は、茂助が養父へ義理も立ち後に殘りし御内室御子息諸共吉晴が身に引受けて養育せん、心置きなく成佛あれと、緣に引かるゝ堀尾が言葉、久吉手負に打向ひ、由緒正しき清忠殿が忘れ筐の此幼子、凡人ならぬ勇士の孝、久吉が家臣となし、竹松が名も改めて加藤虎之助正清と改名し、家名を長く殘さんと、慈愛の言葉に喜ぶ手負虎之助はにこにこ顏ア、殿様の家來になれば今からおれは好きな侍、軍に行つたら大將の首いくつも〳〵切つて見せよう、とゝ様見てゐて下されと、聞くも涙の深見草、花壇の蔭に最前より、忍びこんだる永井早太、物具かためて躍り出で、稲田山の間道を、告げ知らしたる鍛冶屋五郎助、味方の陣へ注進と、駈出す早太、吉晴が、立てきる切戸虎之助、久吉様に奉公始め、目に物見せんと立上り、飛んでおり立ち庭先の苔むす石を手にかけて、目よりも高くさし上げ、稀代の小兒が金剛力、打付けられて早太が最期、微塵になつて死んでけり、堀尾茂助はつゝ立上り、稲田山の間道を聞き取つたるこそ屈竟一、イデ搦手より攻入つて只一戰にかけ崩さん、御用意あれとせき立つ吉晴、アイヤ〳〵稲田山の城廓は、袋の中の鼠同然、久吉が手裏にあり、先づさす敵の今川義元討取る術が肝要ならん、ハ、、、實に尤も、仰せの如く、目に餘つた五萬餘騎、わづか味方の小勢にて、勝利を得るの術やいかに、ホ、、、それにこそ計策あり、此桶狹間の戰ひは、主人小田家の一世の晴業、丹下、中島、善祥寺、鷲津、丸根を始めとして、七ケ所に砦を築き變に應じ機に乘じ見よ〳〵今に義元が首引さぐるは瞬く中、氣遣ひ無用と軍師が金言、いざ本城に出立せん正清來れとはげます木下、はつと勇みの聲高く、是から好きの軍事、幼遊びの戰場にて、敵の首は面はじき菖蒲刀のつゞかんだけ、切立て切立て切まくり、六十餘州はお手車、でん〳〵太鼓攻めつゞみ、見ぬ唐の名に高き、千里が竹馬一ぎたげ手綱、かいぐりさし詰め引詰め武士の、武名は轟く鬼上官、目には涙の別れ路や、見送る父は斷末魔、なう是今が別れかと、とゞむる甲斐も無情の嵐つひにあへなく散りて行く、涙なく〳〵妻と子が手向ける法の導きは、妙法蓮華の露の玉、てらすは月の熊本に、清正宮と仰がれし、神の嫩を櫻木に傳へて今にのこしける。

# 太平記忠臣講釋（たいへいきちうしんかうしやく）

## 喜内住家の段

明和三年十月（二四二六）竹本座上場、作者は近松半二を始め竹本三郎兵衛、三好松洛、竹田文吾、竹田小出、筑田半七等。赤穗義士の復讐を仕組んだ百篇以上もある戯曲中、「假名手本忠臣藏」につぐ名作と云はれ全十段よりなつてゐる。筋も義士銘々傳式になつて居るが、この第七段「喜内住家」が最も勝れてゐる。筋は京都鞍馬口に住む矢間喜内は老病、孫の太市郎は疱瘡、一家は貧に苦しんでゐる。その上、伜重太郎の行方不明から重太郎の妻おりゑは辻君に、又喜内の娘おむつは祇園で勤奉公をしてゐる。處へ重太郎が歸へり、二君に仕へると聞いた喜内は怒るが、父と女房の縁を切つた重太郎は、更に伜太市郎をも殺して恩愛の絆を絶ち、主君仇討の固い決心の程を示す。而も非人に姿をやつした重太郎と辻君となつて出て居る妻のおりゑとが四條河原で互に顔を見合せて驚く件りが第六段の段切となつて居て、それがこの場のおりゑの自害には大切な伏線となる。

中　豊竹和泉太夫
　　鶴澤叶
切　豊竹古靱太夫
　　鶴澤清六

### 人形

| | |
|---|---|
| 舅喜内 | 吉田玉藏 |
| 喜内女房 | 桐竹紋太郎 |
| 女房おりゑ | 吉田文五郎 |
| 矢間重太郎 | 吉田榮三 |
| 傾城浮はし實は娘おむつ | 吉田光之助 |
| 悴太市 | 桐竹門次 |
| 奴關内 | 吉田文二郎 |
| 猿廻し丹兵衛 | 吉田文之助 |
| 茜屋内儀 | 吉田兵次 |

### （床本）喜内住家の段（中）

地　昔は馬に鞍馬口。今は妻子の飼料もかつ〳〵成し素浪人。矢間喜内が老病重きが上に疱瘡子の。熱の指引わんばくも。　フシ常よりいとゞいぢらしく。地近所の見舞相借家の洗濯婆さま頻赤き。猿廻しの丹兵衛茜屋のお内儀　フシ迄紅絹（もゝ）の衿付賊し丶。詞どなたも〳〵いかひお世話。ヲヽばゝ樣嬉しかろ。始の間は惡い出物

で皆きつう案じたがモウこつちの物神様も機嫌よふ今日でお立。ソレ〳〵。イヤ又神様もこんな不自由な所に長居は成るまい。アノ喜内殿も長い病氣。ありや貧乏神の神造りはせずば直るまい。知行取の果じや迚此様に無商賣では濟まいぞや。いつそあの疱瘡子連て。橋の上へでも出やしやつたら。よい知行に有付ふにア、丹兵衛様のめつそふな。おりゑ様といふがせいな嫁御が控へてじやサア〳〵もふ歸りましよ。ヲヽそふせう。コレばさま。疱瘡見舞の持遊びは必捨ずと人形屋へおろして。小遣の足にさつしやれと。地念比ぶりに氣を付て。フシ皆々打連立歸る。地加茂川も。いぢの小川も月やどる流は同じ二人連。地おりゑは門口指覗き。嬉しや誰もないそふな。サアござんせと手を取しが立留り。詞おむつ様頼む事が有わいな。私しは夕べ祇園様へ參るといふて出た程に。アノ七條のかはらに居たといふ事。舅御や母様には必いふて下さんすなへ。アイ〳〵。ほんにわたしも頼が有。とゝ様御浪人の後。一文字屋へ賣れて。浮橋といふ事は母様一人の御了簡。物がたいとゝ様には深ふ隠して。屋敷方の奉公といふて御座んす。必沙汰なしに。ヲヽそりや合點じや。したが風俗なら。詞付なら其びらしやらではつい尾の出そふな事じやぞへ。イエ〳〵。そこはぬかる事じやない。とゝ様に逢たら前の様に。隨分堅ふ三ツ指と思ふて居ながら。里の癖が寫つたは堪忍仕ゑ。其堪忍しゑがモウ悪い。ホンに嗜といふ下から、口が滑つてヲヽ笑止と。地笑ひほころぶ梅花の口。フシ堅く閉たる障子の内。地しはぶきの聲諸共に。父の喜内枕を上。嫁戻りやつたか。孫めが待て居つらふに。早く歸りは仕やらいで。アイ。そふ思ふて心せく道おむつ様に出合何やかやつもる咄しで。何じや娘が戻つた。ヤレ〳〵久しやどこに居るぞ。ハイ是にをります。とゝ様喜内様お氣もじいかゞお伺ひに參じましてござりまするでござんすと。地折目高なる武家挨拶も。どこやら フシしどけなまめける。地聲聞咎め母は立出。詞ヤアおむつ何としておじやつた。サイナ母様。あんまり懐しさに。勤め中を漸と。イエサア屋敷の勤の中を隙貰ふて參じました。成程々々。そなたの勤て居やる屋敷は。堅い屋敷じやと聞たが、つい其様によう出られたの、髪形も美しう。地立派なを見るに付ても。心の苦勞が思ひやらるゝ。詞聞ば嫁女と連立て戻りやつ

たげなが。道で今あやつたか。アイ夕べ河原でア、コレおむつ様。いかにもかはらぬ無事な顔を見たも、毎晩わたしが日參する。祇園様のお引合せ。ヲ、それ〳〵。祇園様のお社で。それはそれは難儀な事が有てなム、難儀な事とは。惡者にでも追れてか。イ、エイナ。ありやおむつ様の言様が惡さ。難儀といふはな。道中に俄雨。イヤ雨ではない俄雪でナアイ〳〵。其雪にあふてはならず隱れふ所はなし。幸の材木でもない鳥居のかげに。お前が日參してござした。いかひお世話でどふやらかうやら。御恩はきつと忘れぬぞへ。ア、是わたしへの御挨拶より。とゝ様のお傍へ行て。ソレ行儀な屋敷の式作法をナ。地お咄なされと氣を付られ詞ハイ取て居まする。誠に久々のお疾ひに。殊のふお臘も遊ばさず。御機嫌よいお顔を拜し。せいもん悦ばしう地存じまするとフシ述ければ。地喜内何の氣も付ず。詞同じ屋敷奉公ならば。先君のお傍仕へもさせんず物。お家は沒落我は長病にて歩行叶はず。悴重太郎何國に吟ひ居る事やら。まだしも老の樂しみは孫の太市。疱瘡も山上仕廻ふたれば。大役濟だ出かしたな。見やれ賢い目元でないか。道侍の子迚疱瘡の中でも。浦嶋やお山人形のぬかつた物は大嫌ひ。公平の人形の顔の赤いは出物の藥。道功の兵に。地成衆ぬ利口者とフシ子よりも孫に餘念なき。詞ヲ、かはいそふに。したが今年は並がよいげな。よい時美しい事仕やつたのほんにマアおりゑ様。此様な疱瘡子の有のに毎晩々々よう日參なさんすのふ、又かいなそんな事わしや聞きたうないと、ひや〳〵思ふ嫂に、言損ひの機嫌取、ドレぼん抱いてやりましよか、伯母が着物もあつかじやぞやサア赤いはよいが、しどのないのにこまつたと、疱瘡の禁句くろめ兼ね、ぜひも。

（床本）喜内任家の段（切）

納戸へ連れて入る。弓矢は家に傳へても、今は仕へん君知らず、羽なき矢間重太郎、羽織野袴大小も、昔に返る立派の骨柄。頼みませうと家來が案内、おりゑ誰れやら見えたぞやアイと何氣も懷かしい、夫の顔にはつとばかり、出て逢ひたさも面目涙胸につかへの上り口、ヲ、何をうぢ〳〵して居やる、誰方ぢやこれへ、ヤア重太郎か。母人まづは御健勝で。ヲ、其挨拶はゆるりとマア〳〵内へはいりや、よう戻つてたもつたの、何やかや咄すこと、アノぼんが

疱瘡しての、コレ嫁、抱いて來て顏見しやいの、ヱ何をうつとりして居やる、ム、餘り嬉しさに氣上りしたの、ソレ茶も汲んでおぢやいのと、母の悅びイヤ〳〵お構ひ下されな。ヤイ關内、身もひまは取らぬ、暫くの間旅宿へいて待つて居れ、何かさし置き、親人の御機嫌如何と手をつけば、喜内もにこ〳〵打ちほゝ笑み浪人の尾羽打ち枯し、旅やつれも嘸あらんと思ひの外、顏色もすこやか衣服の美々しさ、變らぬ體にまづは安堵。ハツア成程、其御案じも御尤拙者も方々とうろたへ、此まゝに朽ち果んかと存じたに、未だ武運つきず、宜しき主取りを仕り、御覽の如く身の廻りも主人より拜領、則ち旦那の御供致し、鎌倉へ罷り下る、折柄親人御病氣の樣子、承つて心ならず、立ちながらちよとお暇乞、ナニ女房二親を預り長の月日、嘸其方も心遣ひ過分〳〵と、常に變らぬ夫の顏色、機嫌よいのも疵持つ足の、裏ではないかと案じ居る。喜内いざりし膝立て直し、ム、奉公の口あつて知行に有りついたとな、ヤイ重太郎女は二人の夫を持たず、侍は二人の主に仕ゆるを、人非人と賤しむ事、母の胎内を出るより、腸にしみ込んでゐる事汝や忘れたな、ア、其根性とは知らず、妻子を捨親を捨て、再び家に歸らぬは、適れ侍は武士なりと心の自慢、親の病氣の見舞に來たさへ、不覺者と思ひしに、二君に仕へて其くさつた魂の、大小をひけらかしに來たか セキコリヤヤイ此喜内はな、貧苦には迫つても、重代の具足は質にも入れず、ヱ、口惜しや歩行自由ならば、古主の御無念を晴さんものと、牙を嚙んで日を送る、壁に劣つた大腰拔け、對面もこれまで女ならば密夫同然、身の汚れた犬畜生、長居せば手打ちにすると、老の怒の一筋も、若し我が事を知つてかと、女房が胸も二ツ玉、はたと立てきる一間の中、思案を極め重太郎、お暇申すと立ち上る、ア、コレ待つてたも、なんぼ親でも今の惡口、腹の立つは道理道理、沒義道なは日頃の氣質、其方のありつきも孝行の爲ぢやもの、あゝ云はしやつても底心に、なんの惡う思はしやろ何事も了簡召されや、イヤサ拙者も急の御用ひまどらば主人へ不忠、罷り歸る、此後は最早お目にもかゝるまい。ハテ氣の短い、急ぎの用なら止めはせまいがわりない無心があるわいの、其方が他國めさつた後は、何をたつきに世を渡らうあだてもなし、道具諸式も賣り拂ひ、やう〳〵嫁女の賃

仕事や、乳呑子抱へて人に雇はれモそれは〳〵憂艱難、口で云ふ様な事ぢやない、喜内殿の病氣の上に、孫が疱瘡、人參と熊の膽で、仕立てにやならぬ煩ひに、常の藥の才覺さへ石で手詰めた貧の病、旅の遣ひは有合ひとやら、親子の中でも金銀の無心はどうやら云ひ憎くけれど、のう嫁女アイ〳〵、よそ他の事ではなし主ぢやとて何の否やがござりませうと、云ふを打消し、ハテ扨コリヤ何を云ふ、最前御老人の詞何と聞く、親子の緣はモウ切れてあるはい、尤路銀はたくはへたれ共、主人より頂戴の金子、一錢も貢ぐ事まかりならぬ、嬉しや今日と云ふ今日、厄介を拂ふて心がさつぱり、義理も絲瓜も一本立ち、女房そちにも暇くれた、イヤサ驚く事はない。科の仔細を云ひ聞かせば、却て身が武士が立たぬ他人になんにも聞く事ないと、塵灰つかねば母親は、顏打ち眺めこれは又きつい思ひ切り、尤も父御へ不足はあらうが、嫁になんの科がある、さう云はずと機嫌直して、何卒今日一日逗留してたも、嫁女止めやいのエヽマ氣のつかぬと様子白髮の氣をくんで、泪片手に夫の傍、水の出ばなへ茶の花香、そつと差出す追從も身を捻ぢ向いて澁面顏、取付島もないぢやくり、詮方なさに稚子を、抱いて出ても見たばかり、あいそなければ恨めし氣に、これ太市、ソレと〻様が戻つてぢやわいの、オヽ抱かれたかろ〳〵、なんぼ抱かれたうてもの父様は抱きやさしやんせぬ、侍の立たぬと云はしやんすも、成程無理とは思はねど、不甲斐ない女の手一つで、御宿老のお二人に、御不自由なめがさしともなさ、いろ〳〵様々に身を碎くはな大概お前も推量してくれたがよい、身にくもりのない云ひ譯がしとうてもどうもならぬ、腹が立つなら堪忍して、太市は可愛いうないかいな、お前ばつかり出世して、子は餓へても構はぬか、つらい貧苦を少しでも、思ひやりがあるならば、三つ四つの重ね着を、一重は脱いで朝夕の、煙の代にとお仰有つても、さのみ惜うもあるまいに、あんまりむごい愛想づかし、さ程つれないお前でも、此子が親と思へばこそ、毎晩熱のうはごとにも、と〻様呼んでと泣くわいの、コレどうよくな父御の傍へいて、母が詫言してたもと、押しやれば這ひ下りて、と〻様のうと縋りつく、恩愛血筋の一聲は、名作の切先に切りつけらるゝ如くにて、鐵石のやうなる重太郎、泪を湛へ兼けるが、氣を取り直し突

きのけて、親の事さへ思はねば、まして伜が事何共思はぬ、緣切つて了ふたれば、菰冠らうが餓ゑうが、此方に構はぬ事、くどう云ふなと睨め付くる。母は興ざめ、コリヤ重太郎扨も〳〵今迄は、又とない孝行者と思ふたが、貧しい親を見限つて、一人榮華をする氣ぢやな、エヽ見違へた道知らず、浪人すれば其樣に、さもしい心になるものか、望の通り親子でない、勝手次第に出て行きおれ子と思はねば恨はないが、天道の御憎しみで、身の行末が思はるゝ、エヽ、淺ましい人でなしと、きせる打ちつけ聲ふるはし、アノ畜生に構はずと、嫁こちへおぢやとばかりにて、恨み泣く〳〵立つて行く。返答もせず表の方、出で行く夫を女房引留め去られた夫を留めはせぬが、出て行く氣なら此の子を連れて行かしやんせ。ヤアたはけ者め去つたからは子でもないわい。イヤ〳〵〳〵、男の子は夫につくが世間の大法、水仕奉公してなりと、お二人を養ふに此子があつてはかせになる、せめて疱瘡子の介抱は、親の不肖ぢやさしやんせと、門へ突出しぴつしやりと、迫氣强ふ云ひながら、戸の隙間よりさし覗き、コレそれが迷惑なら、今一度思案仕直して、立戻る氣はないか心强やとかつぱと伏し、聲も得上げず忍音の、心奥より父の聲。おりゑ〳〵と呼ぶ聲に、アイ〳〵そこへと云ひながら、我子に名殘り後髮。せはし泣く間も姑が、嫁女〳〵に是非なくも、思ひ切つてぞ奥へ行く。さしも義强き重太郎も、我子の枷に縛られて、行きも得やらず抱きしめ、氣は暗闇となりにけり。折柄すた〳〵せきに關内、餘り時刻が延びますから大鷲樣、小寺樣、粟田口迄早御立ち、拙者も御兩人の御供、不躾ながらお先へ參ると、云ひ捨て引かへす。南無三寶遲れしと、傍輩の嘲りなんとせんと、顚倒散亂納戸口。病の床を這ひ出る父の喜内が探り足隔てぬ中の内と外、太市郎が肌押しくつろげ、口に稱名手に小柄、胸を極めて眼を閉ぢ、突込む鋏稚子の、只一聲に息絶ゆる。死骸と共にどうと座し、泣聲一度に父喜内、重太郎出かしたと、わつとばかりにむせ返るはつと驚き立ち上る。ヤレ待て暫しと戸を開き、古主の爲に親を捨て現在の子を手にかくる、其丈夫な魂では敵師直を打ち損ずる事あらじ、オヽそれでこそ我子なれ、天晴忠臣出かしたり、忠義の旅の餞別せんと懷中より金子取り出し、コリヤ此金はな、主君御生害と聞くより直ぐに

彼地へかけつけんと、旅の用意に貯へしが、はからず老病さしおこり、空しく引籠りありながら、此の年月の貧苦にて、例へ餓へ死する共、忠義の金に手をかけまじと、女房嫁にも隠した路銀、御用に立ちやれと投げ出せば、重太郎飛びしさり、ハア、割符を合はす忠義は一體、拙者も爰に五十兩、此金は大星殿より配分の用金、私事には使はれずと、母にもつれなくもてなせしが、父の心をこめられし其金子を申し請け、肌身につくれば親人も、敵討ちの御供ぞや、まつた此金子は御老體へ、拙者が寸志の置き土産、伜が追善佛果の爲、お頼み申し奉る。扨も〳〵武士の、義理程辛きものはなし、連判の侍小寺大鷲拙者なんど、彼師直によしみある藥師寺が城中へ、或は日雇乞食に身をやつし、鎌倉の樣子聞きつゝ、大星殿へ日毎の内通、親妻子にも語らじと、誓紙の手前母人にも包みし段は眞平御免、大事を抱へて故郷へ歸る不覺者と、最前の御意見肝にめいぜし故、手にかけし伜は主君の追腹、未來の先陣よくしたな、追付敵を討ち了せ直樣切腹仕り、冥途より吉左右を申し上ふ、親父樣、オ、必ず待つて居申すと、親子手を取り組んで、思はず知らずはら〳〵と嬉し泪のいとま乞ひ、障子の中にもわつと泣く、聲に恂り立退けば、ノウ重太郎、女房子にも隠す大事、母も出まいと思ふたれど、おりゑが自害しやつたわいの、死顔に一ト目暇乞ひ、それ程の事は不忠にも、わしやなるまいと思ひます、おむつ爰へと二人して、舁いて出でたる死骸に、書き殘したるもしほ草、浮橋取り上げ泪ながらエ、父樣母樣へ申し殘し參らせ候、先立ち候は不孝に候へ共夫の心底立ち聞き致し、恨みは晴れて此身の申譯立難く、是もお二方お貢の爲、淺ましい立君の世渡りヤア〳〵そんなら親父殿の介病に賤しい辻君の勤迄しやつたかいのう。エ、往人の人に合力を受け、肌身ハ汚さず候へ共、夫の疑を受け、これのみ迷の種になり參らせ候、わけて悲しきは太市郎、疱瘡もかぜ口になり、悦ぶ甲斐もなき別れ。オ、道理じや〳〵、生ひ先ある子を殺して、何の生きてゐる心があらう。オ、可愛や〳〵なアエ、一つ今朝貰つて歸り候でんぶの曲物、膳棚に御座候、父樣のさいの物にお上げなされ下され候、一つ裾のきれし私が袷、ぼんが餘所行きに縫かけ置き候が、心がゝりに候まゝ死骸に着せて御葬頼み上げ參らせ候、御介抱申す人もなく

御不自由の程如何ばかり悲しけれ共一時も早う冥途の殿様に夫の心底申し上るを樂しみに相果て候、重太郎殿へは面目なさに、何事も書殘さず候、めでたくかしくの終り迄、夫に立つる眞實の、又と比もない貞女を一日安堵の思ひもなう、辻君と迄身をなして、朽果てさせし可哀やと、空しき死骸に抱付き、前後不覺に取亂す、喜内汨を押拭ひ、主人の爲なればこそ、傾城となり、非人となり立君となる心づかひ、か程の忠臣重太郎を、子に持つた此親父、我もちつとも悲しうない、死しての後の名こそ惜しけれ、祝ふて目出度ふ別れの盃、おばばつぎやれと取上げて、奥齒もれ來る謠聲、實に名を惜しむ弓取は誰もかくこそあるべけれ。やあらやさしの我子や健氣やと、泣かぬ顔する父親の、にこ〳〵顔も此世の名殘、ハツハア〳〵、仰せにや及ぶべき、我子のほだしを切つたれば心の鐵石十倍增し、主君の敵の其上に、妻の敵、子の敵、一時に討つ門出と思へば心に勇みあり、例へ天地をかける共、念力通つて師直が、首提げんはまたたく内、早おさらばと立上るもうおいきやるか、やがて目出たう吉左右吉左右、其吉左右とは愛し子が、命を捨てに行く旅路、冥途の案内は嫁と孫、三途の川を急ぐらん、可愛いと見やる野邊送り、今朝は祝ひし神送り、門に捨てたる猩々も、汨の種の笑ひ顔、しをれ勇んで出てゆく。


# 春の大歌舞伎

三月一日初日
毎日午後三時半開演

第一　食滿南北作
**國府の清水**
文樂座太夫三味線特別出演

第二　福地櫻痴居士作
**伊賀越道中双六**
小幡より千本松原まで

第三　新歌舞伎十八番の内
**鏡獅子**
郷田　恵作直演出
長唄　囃子　連中

第四　死にかはり生きかはりつゝもろともに櫻原の宮にかへさざらめや
**さくらあづまを**　六場

第五　食滿南北新補
**鴈のたより**　一幕

御觀劇料
特等　四圓五十錢
一等　三圓八十錢
二等　二圓五十錢
三等　一圓五十錢
四等　五十錢
（他に各等入場税一割）

どうとんぼり
**中座**

## 壽式三番叟

翁　千歳
三番叟
三番叟

竹本文字太夫
竹本大隅太夫
竹本呂太太夫
豐竹伊達太夫
竹本南部太夫
竹本相生太夫
竹本織太夫
豐竹伊勢太夫
豐澤竹本廣太夫
豐澤友若
豐澤友造
鶴澤清助
鶴澤仙糸

翁　千歳
三番叟
三番叟

人形

吉田玉蔵
吉田榮三郎
桐竹紋十
吉田玉幸

## 壽式三番叟（ことぶきしきさんばそう）

元來「三番叟」は芝居の始まる前の儀式として行つたもので、演劇の起原が神事に聯關してゐることを暗示してゐる。所でこの「三番叟」が能の「翁」から來た事は周知のことであるが、歌舞伎や音曲へ入つて儀式的の場合にのみ「翁」が尊重され、見た目の樂しさ、旋律の興味は寧ろ三番叟の方に集められた。隨つて音曲では通稱「何々三番」と云ふ位三番叟中心になつて居り、殊に本曲では三番叟が二人出てヘト〳〵になるまで踊り競べをする所が特色となつてゐます。さて餘談乍ら、翁の白面は白色人種を、三番叟の黑面は黑色人種を、千歳の直面は黃色人種を――つまり三民族が互に仲良く踊る所に何かを意味するものがあります。

（床本）壽式三番叟

夫豊秋津洲の大日本。國常立の尊より天津神七世の後。地神の始天照大神岩戸に籠らせ給ひし時。世は常闇と成りけらし。其時に四方津神。八百萬の御神達、神集に集め給ひ燎火をたいて庭神樂神すゞしめと木綿襷太祝詞の。神歌や式三番の其謂おさ〳〵申恐あり。とう〳〵たらり〳〵ら。たらりあがりらゝりとう。ちりやたらり〳〵ら。たらりあがりらりとう。鳴るは瀧の水日は照る共たへずとうたりありうどう〳〵〳〵どう〳〵と鳴る鼓。宇佐の神の御役にて。笛の初音も高窓や、笛吹の大明神。大鼓は高野の大明神。太鼓は熱田の源太夫。いづれも秘曲の打囃子鳴は瀧の水。日は照神の神勇めさ

れば春日の大明神。翁の袂ひるがへす。扇の手こそ面白や。青にぎて青丹よし、奈良の都の三笠山。かげもあらたに慈悲萬行七五三の歩みの大事十五の拍子、とり〳〵に萬代の池の龜は甲に三曲を戴いたり。瀧の水麗々と落ちて、夜の月あざやかにうかんだり。渚の砂さく〳〵として朝の日の色をらうず。天下泰平、國土安穩の今日の御祈禱なり。千秋萬歲悅びの舞なれば一舞まはふ萬歲樂萬歲樂。〳〵〳〵。長久圓滿息災延命今日の御祈禱なり。おさへ〳〵おふ悅びありや、我此所よりも、外へは行かじとぞ思ふ物の音につれて立舞ふ小忌衣、千歲は近江なる、白髮の御神なり、黑き尉は住吉の大神、皷は浪のとふど打音は高天が原なれや岩戸に向ふ神かぐら、ふそろぐせりと吹笛も、ひりやひしぎの音色迄春は霞の立姿、サンバン、物に心得たる後の太夫殿にげんぎう申そう、アトてうど參つて候、サンバン、誰お立候ぞ、アト年頃の朋輩友達御後の爲に罷出で候、今日の三番叟猿樂、きり〳〵尋常に舞ておりそへ、色の黑い尉殿、サンバン、此色の黑き尉が今日の御祈禱を千秋萬歲所繁昌と舞納めふずる事は何より以て安ふぞう。先後の太夫殿は元の座敷へおも〳〵と御直り候へ。アト某が元の座敷へ直ろうずる事は尉殿の舞よりもいと安ふぞう、御舞なふては直り候まじ御舞候へ、サンバン、御直り候へ御舞候、へサンバン、あゝゆろばたしやアトさらば鈴を參らせふ、サンバン、そなたこそ、初日は諸願滿足圓滿二日の日は又二ツ柱鈿女の神子が一、二、三、四、五、六、七、八九度か百千萬の舞の袖五月のさ女房が笠の緒を列ねて早苗おつとり打上げて諷ふた千町萬町億萬町三人田をばぞんふりぞ〳〵そんぶり〳〵〳〵ぞ御田を植るならば笠かふて着せふぞ、笠買ふてたもるならば猶も田を植ふよ、三日は福德壽福圓滿子德人の子寶車座にならべた。たつまついるまつかいつくひつ付火うち袋にふゝりと付て候ぞ、是式三の故實にて、三日、是を舞とかや柳は綠花は紅、數々や濱の眞砂は盡る共、盡せぬ和歌ぞ敷島の神の敎の國津民治まる家こそ目出たけれ。

# 長右衛門（おはん）桂川連理柵（かつらがはれんりのしがらみ）

## 六角堂の段
## 帶屋の段

本曲は安永五年（二四三六）北堀江座に上演された菅專助作になる上下二卷のもので、六角堂、帶屋はその下卷にあたつてゐる。お半長右衛門に絡る實說は種々あり、またそれを題材に歌舞伎、義太夫劇ほか音曲諸流派にも色々と取り扱はれたが、要するに本曲では戀は思案の外とて、十四のお半と卅八の長右衛門の異常な戀愛を中心にしてゐます。その筋は、帶屋の長右衛門は遠州からの戻りがけ、石部の宿で伊勢詣りから歸る信濃屋の娘お半と丁稚長吉、乳母等と泊り合せた、その夜長吉が無態の戀慕にお半は長右衛門の部屋へ逃げたのが緣の端、また十四のあどけないお半は分別盛り卅八の長右衛門と異な契りを結ぶ。帶屋の家では父半才の優しいにひきかへて義理ある母の邪慳、實子儀兵衛を可愛がつて長右衛門を憎む。女房おきぬはまたこの上ない貞女で夫とお半との仲を知りながら常に夫を庇ふ。分別盛りの長右衛門が心痛はこの家内の波風にかてゝ加へてお半の腹帶、すりかへられた政宗の差添の詮儀、所詮生きては申譯立たずとお半を脅に長右衛門は桂川へ身を投げる。

竹本鶴澤寛治郎
豐澤駒太夫
鶴澤清二郎

### 人形

女房　おきぬ　吉田文五郎
丁稚長吉　吉田玉藏
弟儀兵衛　吉田榮三

（床本）

## 六角堂の段

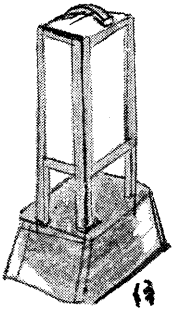
名に高き妻も都に隱れなき六角堂といふ靈地有り我思ふ心の内は六つの角只丸かれと夫婦中祈る願ひかぐる〳〵と御堂を廻る帶屋のお絹供さへつれぬお百度參りまはり仕舞の圖を

かんがへ後を慕ふて小舅儀兵衛アヽ
コレ〳〵お絹様ちよつと〳〵と小影
へ招き奇特に毎月お百度はいかなる
願ひでましますぞへハテ女子の願ひ
はいつ迄も夫婦中よう第一は舅御様
御夫婦のどうぞお氣に逆はぬ様にと
觀音さまへかける御苦勞したり貞女
かな〳〵其心に惚れた我ら明くれく
どけどむごい返事夫婦中よふ祈つて
も兄貴は魂が返つて有るマ美くしい
こなさんを置て河東へ這入込自前の
藝子にマひどい乘夫でたらいで隣り
のお半にひゞきを入れたを知らずか
へ、アヽ儀兵衛様やくたいもない折
々の東通は殿御の有内間柄といひ年
も行かぬお半様そんな事が何のあろ
そりや皆世間のいひなしてんごうに
も言ふて下さんすな、テモマ愚睟人
では有るはいのみだらな證據はコレ
此狀じやてな長さん參るお半より此
片かはもどきな狀が有てもまだそふ
でないかいのムヽ成程ソリヤマア合
點の行ぬ文一寸貸て下さんせヲツト
どつこい久しいものじやがサアそれ
から御らふじハヽヽヽちと此方に
入用な證據の狀それ共にわしが言事
うんといふ心ならハテやるまいもの
でもないサアどふする氣ぢやと寄添
へばうるさふ思へど男の爲荒立ては
と上手者、主ある私をよもやと思へ
ど眞實ならばおりを見てエヽ忝い、
そんなら手附にお口を祝ふアヽコレ
人が見る先へ〳〵へ突飛されてふな
〳〵〳〵後から早くも尻くらひ觀音
堂を別れ行、後につゝくりとつ置つ
思案に逝はも忘るゝお絹寺内へ不躾
肴籠さげてふら〳〵丁稚の長吉ヤお
絹さんじやないかいな爰に何してご
ざりますヲヽ長吉殿か、わしや觀音
様へ參つたがちとこなたに咄したい
事が有ヲヽよい所で逢ましたサマア
〳〵爰へ〳〵ハテマア爰へおじやい
のふ、さよならお絹さん御免なして
下されやシテ咄しといふはなアノ咄
しといふは外でもないがのそちのお
半様と長右衛門殿との、ハイ知てゐ
る段かいな〳〵イヤモウどえらふ知
て居るはいなアアノナ石部の宿屋で
泊つた時になェツトツトもけつたい
な事を見てなやつぱり今にむねはく
ら〳〵〳〵ヲホヽヽヽヲヽそふで
あろ道理〳〵惚てゐやるお半様を寢
取られたら腹が立筈アヽいへ〳〵
〳〵お家様〳〵何のわしがお半様に
アヽイヤコレ隱しやんな知て居るが
わしが言よふにさへしやるならそな
たの戀は叶へてやるが何と談合に乘
氣はないかェヽそんならアノ何かへ
アノお前様の言やうにすりやお半様
とわたしが戀はヲヽ叶へてやる〳〵

はいのふエ、そりやマアほんまでござりますかヘヤそんなら言ふかいな何じやいなアノナお絹様お前様の手前もマちつくりちつと恥かしいがなアノナ有様はお半様にほホ、、、、アイ首切惚て居ますはいのふ女夫にして下さんすならどんな事でもヲ、其心なら近い中こちの内で此事を打割て山あげるサ其時そなたがそこへ出てお半はおれが女房じや伊勢參りから念ごろして居るとつゝばつて言やるとのこちの長右衛門がモどのやうにあらそふてもあの人の手へはアイわしが入ぬハテ主であらふが家來で有ふが戀に上下の隔てはない一度でも抱れて寢たと言拔ればそなたの戀も叶ふといふものマよふ合點がいたかやヘイム、成程そふじやな誰がどふ言てもおれが念ごろしているといひはる事は合點じやがそふしたら大方こちの後家様がわしを追出すで有ふぞへハテそこらを案じて色事が出來るものかいの、もし追出さるゝに極つたらお半はおれの女房じやと大きな顏して連て出やアゝいへ〳〵申しお家様〳〵連ては出られませぬわいなそりや又どふしてサイナ連て出ても行所がござりませぬサアそこはわしが呑込で二人ゆるりと暮すほど金はわしがつゞけてやるエゝそんならアノ金を貸ておくれなされますかへ是はマア〳〵何から何まで大きに御世話でござります何のゆかりもない人に海山御恩の其上に又色々の御苦勞かけお金出して私が戀叶へて賜はるお慈悲心思へば〳〵エゝコレマ勿體ないヲ、長吉殿何のいのふこれはマア當分の小遣ひと巾着より取出す金小杉に包んで手に渡せばエゝこりや何じやいなヨヲ、コリヤ金じやヲお金じや〳〵ハ、、、、エ時にとエゝ一朱二朱三朱四朱ハア、こりや十二朱有はいハ、、、、是をさつぱりはづむとはアゝ氣の幅びろなお絹様エゝ有がたい〳〵有がた山のほとゝぎすとけつかるはいハ、、、、イヤモ夫に違ひのない事ならお前の下知は背きませぬヲ、よし〳〵そしたら連立て逝ませふしかしコレ長吉の色事しめアイタ、お絹様なんだすいなおだてゝおくんなはんなハ、、、、サ、行ませふ〳〵おつとお供を誓願寺三條通りを眞すぐに柳の馬場を上り行く。

（床本）帶屋の段（切）

柳の馬場を押小路、軒を並らべし臭服見世、現金商ひかけ硯、虎石町の西側に、主人は帶屋長右衛門、井筒に帶の暖簾を、掛値如才も内儀のお



# 帶屋の段

切　竹本津太夫
　　鶴澤友次郎

**人形**

女房　おきぬ　吉田文五郎
母　おとせ　桐竹紋太郎
親　繁齋　桐竹門造
兄　長右衛門　桐竹政龜
弟　儀兵衛　吉田榮三
丁稚長　吉田玉藏
信濃屋お半　桐竹紋十郎
若い者　大ぜい

絹氣の取りぐるしい姑に、目をもらはじと襷がけ、洗濯物を引のしの、鍛は寄つても岩乘作り、母のおとせは勝手を出で（詞）朝飯の箸下に置くとかけ出した長右衛門、もう書過たに戻らぬは、又川東で呑すえて居るのであろ、お絹ちつと云はしやれぬかいの。イヱ〳〵、遠州の殿様から請取の脇差、研屋からくると其のまゝ藏屋敷へ持つて參られました。サイノ、脇差の研が出來ましたと持つて行くばかりに、から暇が要つて内の見廻しが出來るものかいの、アヽ同じ事でも弟の儀兵衛めは、モ痒い所へ手のゆくやうに精出し居るに、ヱ兄のぬるまに困つたと、繼子を憎み實の子を、持囃したる贔負口。聞きかれて隱居繁齋、珠數爪ぐつて奥より出で、（詞）アヽおばゝ聞辛い、死なれた隣の治兵衛殿が、五つになる迄育てられた長右衛門、無理に貰ふて家の根づき、死だ先の女房は隣への義理があると、あらい詞もつかはなんだに、長右衛門成人以後後妻に直つた身を持つて、連子の儀兵衛ばかりを大事にかけ、兄が事と云ふとがみ〳〵、ヱヽちとたしなみやれ、ヤコレ嫁女。氣にかけてたもんなと女房にかはる佛性、（詞）オヽその結構を見込での、財産をさゝほうさにする長右衛門、隨分と可愛がらしやれアヽやかましやの〳〵、コレお絹隱居へ連れて居て、書寢などさしてたもれと、負けて居ぬ口逆らふは、後生の邪魔と繁齋は、裏の隱居へ嫁引き連れ、行くと戻ると一時に、儀兵衛はとつかは内に入り、母者人聞かしやれ、一昨日兄貴が取りに行かれた駿河の爲替、未だ金を見ぬ故、合點がゆかぬと飛脚屋へいて聞ふたれば

一昨日長右衛門殿に渡したと、爲替手形を出してみせた、すりや爲替の百兩は、兄貴が宙で盗ねたに極つたオ、左樣であらう共左樣であらう共戻りおつたら吟味して、親父殿への面當、ぐつといがめてよい樂しみ、イヤコレ儀兵衛、今一つよい事はノウ、昨日登つた濱松の五十兩も、金戸棚の合鍵して、コレ見やちよろり盗んで置いたは、金の入るわが身にやりたさ、爲替の金をくすねたからは、これも兄めに塗付ける。出來た〳〵母者人、コレ此五十兩はの、コレかう〳〵と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘の一腰こしにさしつまる、難儀をなんと投首し、しほ〳〵歸る我家の内、見るより母はやんぐわん聲、五丁か十丁ある屋敷に、半日の上かゝつて、内の事は何になる、朝からげい子やお山狂ひも、あんまりてうでござらうと、わめくは隱居の耳へつゝ抜け、又鬼婆がしやら聲は、長右衛門が戻つたかと、お絹をつれて親繁齋、詞さつきにも云ふて聞かすに、長右衛門さへ見りやかみ付く樣に、近所の手前もちと思やれ、長右衛門もひだるかろ、ソレお絹早う飯をおましや。イヤ飯所ぢやないぞ、問はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門、一昨日取りにいつた爲替の百兩、ドレ金見やう爰へ出せと、云はれて吐胸の長右衛門。イヤ折角參つたれど、先の亭主が折惡しく留守金は明日受取る約束。ア、コレ〳〵〳〵兄貴、エ、ぬけ〳〵ぬけ〳〵、嘘を云はつしやるな、已やたつた今先へいつたれば、金はこなたに渡したと、爲替手形を出して見せたが。それでもこなた受取らぬか。エサアそれは。アノ金は明日の約束で先へ手形はやるまいがの。兄貴、イヤ先へ手形はやるまいがの。ア、コレイノコレ儀兵衛々々詮議にや及ばぬ、モウ川東へ飛んだぢやろ、昨日登つた五十兩も心元無い、サア爰へ出して見せい、あつと云ふより長右衛門、巾着の鍵こて〳〵と、金戸棚の引出し明け詞ヤア五十兩の爲替の金がない、どうした事と驚く夫、お絹も惚り繁齋も俱に驚く呆れ顔詞オ、盗人たけ〳〵しい、鍵の下りた此の戸棚鍵持つた者が出さいで、誰が取るぞいやい、ハア之もお盗み遊ばしたのぢやな。オ、適な家の根繼ぢや〳〵〳〵ノウ、根繼ぢや〳〵親父殿も安堵であらう、嫁御嘸嬉しかろノウ。イヤコレ母者、そればかりぢやないまだ〳〵まだ〳〵ど減相な事があるわいの、コレ隣の娘お半と兄貴が念頃して居ると近所から云ひ立つれど

ア、いとしなげに兄貴に限つて、猥らなと云はうか、マおとなげないそんな事、よもやあるまいと思ふたがコレ／／／違ひない、コレ／／コレ此狀で、エ何ぢや書きおつたな、爰らあたりから讀みかけやうか。エ、何ぢや、エ、ヘエ口の間はとつて退けてと、伊勢參りの下向道、石部の宿の假枕、今しも忘れかねゐ。どうぞどうぞ今一度、ヤアノ嬉しき御見を願ひ上げゐ。長さまいるお半より、ハア、ませたり／／小へげたれめが。ヤア／／そりや大それた不義いたづら、兄弟同然と云ひ、恩ある家の小娘をそゝなかし、嫁入の邪魔をおのれマあようしたな、コレ親父樣、なんとがみ／／云ふが無理か、水昌輪の樣な儀兵衛、最負口でござるかやと。惡は惡でも當座の理詰。長右衛門は身に冷汗、親繁齋も胸迫り、詞長右衛門、エ、情けない事してくれたな、色は心の外とは云へど、モ餘り圖のない取合せで、おりや世間へ顏が出されぬ、嫁女の里へもどの顏さげ、どう挨拶の爲樣があらう。指さゝれぬ帶屋の家、暖簾に泥を能くぬつたと、始めて聞いた親の恨み、胸に釘打つ長右衛門、アヽ面目涙にくれ居たる、お絹は舅の傍により、詞一圖にお聞きなされては、お腹の立つは尤なれど、長右衛門樣に不義はない、ありや相手が違ひました。アヽコレ／／是お絹女郎、去りとては／／／、今讀んだをどう聞かしやつたのぢやぞいのう、其上にコレ／／／長樣參る、貧乏搖ぎもならぬわいの。サイナ其長樣がきつい間違ひ、お半樣の色の相手は、内の子飼の長吉ぢやわいなエ長吉、ハ、、、、ハ、、、コリヤ臍が石橋舞うわい。ハ、、、、まだ／／と競合ふより長吉々々、長よ／／内に居るかい。一寸來てくれ、ちよつとちよつとに門口から、どやげば隣の内より長吉、疾しや遲しと走りくる、義兵衛は落付く布袋形、詞コリヤ長吉。我とそちのお半女郎と、念頃して居るといやい、覺えないと、ソレさつぱりと云ふてしまへコレ／／コレ長吉殿、爰ぢや／／、ノ合點か、サア覺のある事云ふたがよいと、お絹が目まぜ呑込む長吉、詞エ、何んぢやア、何んぢや、皆樣の手前もエヽちつくり面目ないが、エヽアノ何ぢや、アノアノ伊勢參りの戻り、ナア、石部の宿屋でちつくりと面目ないが、お半樣と女夫事、アイ、念頃して居りますからは、お半樣はわしが女房。ヤイ／／／そりや何ぬかすぞい、コリヤ／／／

此狀ナ。サア此狀に、長樣參るお半より、ヱ、義兵衛さん七くどい、長樣參るはおはもじながら此長吉。ヱ、何の事ぢやぞいやい、テモ藝氣のない奴と、義兵衛は天窓(あたま)かきむしる 詞 申し母樣、現在の戀の本人が出たからは、夫に不義はござりませぬぞへ。ハテそりやもうしよ事がないわ、が爲替の百兩と五十兩はどうしたぞ、サア長右衛門白狀せい。申し母者人、如何にも百兩の金は私が惡づかひ、なれ共五十兩の金はぞんじませぬ、こりやどこぞに合鍵した盜人めが。あるなら出せ。其盜人は、サア誰ぢや。鍵を持つてけつかつて居て盜人は外にある、ム、盜人は外にあるとはアヽ何か、コリヤアノ白川樣から釣取る樣な義兵衛や、如來樣見る樣な此母にぬりつけふと思ふのか、乞食の子やら、盜人の子やら知らぬ捨子のおのれとは違ふ、素性正しいこちら親子に、科を着せやうとする橫道者めが、サア〳〵五十兩の行端を云へ、云はぬか、云はぬとかうぢやと棕櫚箒振上てりう〳〵、〳〵、肩腰分けず打ちすえる。こりやあんまりとかけ寄るお絹。箒をしつかと動かせず、 詞 ヱ、ヱ、、、お前はなア。何とした。何としたとはヱ、胴慾ぢやわいな〳〵、いかに亂腹分けぬとて、さう酷たらしうはせぬものじやわいな、云はぬが禮儀孝行なれど、お前方の氏素性も、あんまりあやは脫けぬぞへ。サア云ひませうか、云はうかと、腹立つまゝの捨詞。眞面目になつた母息子、長右衛門は女房を引退け 詞 コリヤ母に向ふて慮外な惡口。それでもお前。云ひ止まぬか、サア〳〵〳〵何云はしやんす、禮儀も人によるわいな、なんぼ結構にあしらうても、かみ合けのあるかゝ樣ぢやない。ヱ、私や腹が立つ〳〵〳〵と、身をふるはしたる無念泣き、心根不愍と引寄せて、道理ぢや〳〵が、コリヤ親ぢやわいやい〳〵、親と云ふ字で何事も、虫を死なす胸の中、思ひやつてくれ女房と、拳を握り男泣き、 詞 オヽそれ〳〵、親ぢやぞ〳〵、親に向ふて何の不足、コリヤ義兵衛、ちつとかはつて箒の役、叩きのめして金の行衛を、オヽ合點と棕櫚箒、振上る手をぐつと捻上げ 詞 ヤ我にはよう叩かれまい。美事兄をわりや打つか。イヽヤ弟が打つのぢやないぞ、おれが名代にどづかして〳〵、金の白狀さするのぢや。いや白狀も絲瓜もいらぬぞ。兄に指でもさしたらば、此繁齋がうぬをぼいまくるぞ。コレ親父殿金を盜んだ長右衛門、何んでこなた

量屓する。ソレそれが大たわけの親玉とやらぢやわい、長右衛門は此の家の主人、百五十兩が千兩でも我物を我が使ふが、又撒きちらさうが心次第、それを盗んだと詮議立て阿呆臭いわい、づけ〳〵物を吐かしたら昔の飯焚きお竹にぼいさげ、長右衛門女夫が草履直さし、詞親子共にぶちのめさせて責つかはすぞと、道を立てたる父親の、情に女夫は有難涙親子はふくれる燒餅顏、詞アヽ義兵衛草臥たノウ、臺所で一ぱいせうかい。オヽそれがよござんしよ、コリヤ長吉め、失せい、おのれにや大分臺詞があると、弱身を見せぬ親と子が、後に引添ひ出來合の、つぼをかぶつた色事師、打連れ勝手へ入る跡を、早くれかゝれば下男、燈す八方行燈の灯、佛檀の御明は年寄役と繁齋が、こて〳〵燈せどしめり居る女夫の者を膝近く、詞一年々々尻が溫もり、道も義理もしらぬばゝめ追ひまくるも合點なれど、七十に近い繁齋、女房の離別が見目でもないと、モ堪忍の胸をさすつて居る、したが否と云はうが應と云はうが、近い内隱居へ呼び取り、母屋の事は構はすまい。女夫年らそれを樂しみに煩らはぬ樣にしてたも、又長右衛門も何やかや、氣の揉める事もあらうが、浮世に長うも居れぬおれに道樣事など見せてたもんな、物の譬へはあれアノ御燈、僅か燈心一筋でも、油との持合で燈つてある、油は繁齋、燈心は長右衛門、暗いと云つてはかき立て、すり込むと云ふてはかき立て、段々とかき立て〳〵、もがきあせつて燈心が無うなれば、油はあつても家は暗闇、ア其氣の細い燈心一本、コレ高が町人の身の上で、これが恥の立つ立たぬとは畢竟心が狹いと云ふもの、ぢつと堪へて氣をかき立てさへせねば、いつ迄も身は有明行燈遠州の御用も相變らず聞く樣に、親に安堵を頼むぞやと、くゝめる樣に箸折り鏡、心は親身かゞむ腰、伸して佛間に入にけり。親の慈悲心身にこたへ、差俯向いたる夫の傍、云はんとすれど胸ふさがり、しばし、詞も出でざりしが、コレ長右衛門樣、道理は道理なれど、お前はきつうすまぬ顏ぢやが必ずひよんな思案やなど、怪我にも出して下さんすなエ、姑御や小舅につらい氣兼も辛抱も、お前と云ふ人あればこそ十年連添ふ女房の手前、立たぬ事も何にもいらぬ、おやま狂ひも藝者遊びも、そりや殿達の器量と云ふもの、お半女郎と二人が仲、ひよつと私が知つたかと、言譯にさしやんす媒酌、詞愚鈍

な者でも女房ぢやと思ふての心づかひと、私や心で拜んでばかり居りました、其の返報ではなけれども、緣組を變改は、年はも行かぬあの子でも、もしやお前の樂しみになりませうかと心の奉公、詞私は疾うから知つては居れど、恪氣所か顏へも出さぬは、氣の毒がらすが笑止なと、結構な舅御と意地くれ惡い姑御の耳へ入ろかとそれが悲しさ、私も女のはしぢやもの、大事の男を人の花、腹も立つし、恪氣の仕樣も、滿更知らぬでなけれ共、可愛い殿御に氣をもまし煩ひでも出やうかと、案じ過して何にも云はず、六角堂へお百度もどうぞ夫にあかれぬ樣、お半女郎と二人の名さへ、立たぬやうにと願立も、はかない女の心根を不愍と思ふていつまでも、見捨てず添ふて下さんせと、夫の膝に打ち伏して、くどき立てるぞいぢらしき、長右衛門も目をすり赤め、詞女房共忝ない、云やる事が道理だらけ、道理のないはおれが身一つさりながら百兩の金を色遣ひと云ふたは嘘。そなたの弟才次郎が、死ぬるを助けた雪野が身の代。ヱヽそれはまあ。サヽサア堅う此事云ふまいと思ふたれど、浮氣らしい色狂ひと思はれまい爲の言譯。わが身の弟の事なれば、惜しくは思はぬ爲替の百兩、又五十兩の盜人はしつかりと知つてあれど、サア詮議をすれば不孝になる、此二た口の譯は立てど、面目ないはお半が事遠州よりの戻りがけ、お半は長吉乳母諸共、伊勢參りの下向道、石部の宿屋で泊り合せ、私は口の座敷に寢て居る、お半が來て起したも、夢現に聞いて居れば、長吉が參りがけより無體の戀路、明日はいぬれば今夜はこゝにと泣沈む、私が知つては長吉が氣の毒に思ふであろし、殊に又子飼の奉公人、内へいんでも必らず母御へ告げてやりやんなサア夜明も近し、乳母が傍へと、ヱヽモウらちも無い事、我身ながらも愛想がつき連添ふそなたに顏上げて云ふも云はれぬ身のあやまり、美くしう云ふてたもる程、おりやモ面がかぶりたい堪忍してたも、こらえてたも、併しこれもさつぱり埒明けてしまうたれば、どこへなりとも嫁入するであらうぞいの、親父樣の有難い意見と云ひ、ハテ過つて憚からぬおれが身の上、何にも案じる事はない、兎角これまでの事は、コレあやまつた〳〵ヱヽわつけもない〳〵〳〵女房に何の詫、もう此事はさらりと流して又云ひ出さぬかための盃、わしや肴拵へよう。一つ上つてちとお休み。詞

そんならさうせう、ア、氣くたびれか、ふら〳〵ねむたい、其間も一睡ヤツころりとこける、夫にあてがふ枕蒲團打着せ女房は、勝手へとつかは行くかげを蒲團の中より手を合せ（詞）不所存な長右衛門を、男と思ふて辛抱する心いきの嬉しさ過分さ、千萬年も連添ふて禮が云ひたい、たんのうさせたい、取分けて五つからお世話なされた親父様、末期の水も上ませず、逆様事の歎きをかけるは不孝と云はうか道知らず、さつきの御意見お絹が心底、聞けば骨身をさかるゝ苦しみ、親父様の御了簡お絹の心はさばけても、さばけぬものはお半の事、死なしやつた治兵衛殿お石殿へ恩を仇、其上屋敷へ持つていた正宗の差添は、マアいつすりかへられたも知らぬ贋物、最負強いお留守居も、お國へとりなす詞がない、今夜四つ迄に詮議仕出せと、モ御了簡は付いたかと、どこを詮議も雲も閣、所詮生きては言譯立たず、モ死なうと覺悟極めたれ共、（詞）親父様やお絹が顏、名殘に一目と見に戻り、いよ〳〵女房に苦に苦をかけ、不幸に不幸の覆輪かける、此身は何たる大惡人、モ、ゝ、ゝ、愛想もこそもつき果てた、我身の上と忍び泣き、枕も漂ふ涙なり。同じ思ひを信濃屋のお半は胸の憂さ辛さ、よそ目を包む振袖の内を覗いてよい首尾とそつと這入つて枕元、（詞）長右衛門様今朝下さんした文の返事ちよつと逢ひにさんじたと、ゆすり起せばとぼけ顏、（詞）フウオ、お半か、返事に來たとは合點がいたか、成程お前のお仰有る通り得心してこれ切にとんと思ひ切りませう。オ、出かしやつた〳〵〳〵、それで互の身の納り、世間の噂もひとりやむ、サア〳〵其心ならこうして居ると又浮名、ちやつと内へ去んでたもヤ、アイ〳〵私やモこれを限りに、さつぱり内へ歸りますが、お前は隨分お達者で、（詞）見納めに今一度顏を、よう見せて下さんせと抱起して顏つく〴〵、見る目もあかれぬ雨やさめ、長右衛門も此世の別れと、口へ出さねど心の内、（詞）コレ何もきな〳〵思はずとのう、コレ煩はぬ様に〳〵、母御へ孝行。アイ〳〵今迄はよう可愛がつてくださんした、禮は云はずに氣を揉まして。アゝやくたいもない子ぢや、死別れ、サア死別れではなし緣は切つても朝夕見る顏。アゝコレ〳〵〳〵誰も見ぬ内サア去にや〳〵〳〵コレ去にやいのと突きやられ、名殘も惜しの離れ得ぬ衾をわけて出て行く、果は桂の川水に、浮名を流すぞはかなけれ。虫が

知らすか長右衛門、詞ア、どうやらおかしい今の去にやう、合點がゆかぬと門の口、落ちた一通灯かげにすかし、詞書置の事、扨こそとかけ出しても宵闇に、かげさへ見えぬ四つ辻を、又かけ戻つて見る書置、佛壇の間に繁齋が、看經の聲いつよりも、無常を誘ふ鉦の音、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛なむあみ。エ、讀み詞おまへと緣切り外々へ嫁入りする心もなく、殊に只ならぬ此身、世間へ知れては私が恥は朕はねどもお前の名を出すが悲しく、お絹樣への詫言や、かゝ樣に叱られぬ中、桂川へ身を投げ候。エ、お前は御無事で御夫婦仲好う折々には一遍の御回向願ひ〻、エ、。ア、可愛や、突詰めた娘氣で苔の花をちらさすも、皆此長右衛門がなした業じやわいの南無あみだ〳〵、讀み詞嘸ぞやかゝ樣の歎き力落と存じ候間、江戸の兄樣を呼び戻し朝夕の御介抱頼み上げ〻。コレ〳〵〳〵そなたが死んでは猶もつて生て居られぬ長右衛門、一所に死ぬが親御へ言譯、ア、如何樣因果は車の輪、十五年以前、宮川町の藝子岸野に登り、つまらぬ事で桂川へ心中に出た所、先へ岸野が身を投げたを、見るよりふつと死に遲れ、人の知らぬを幸ひに、其場を逝れ今日迄は生延びしが、思へば最期の一念にて、岸野はお半と生れかはり、場所もかはらぬ桂川へ、我を伴ふ死出の道連れ、ホウ、これこそ因果の罪亡し、さうじや〳〵と觀念し桂川へとかけ出す。


# 新舊大合同劇

**二月廿九日初日**

毎日正午二回開演
五時半

第一 哀しき花嫁 一幕二場
熱屋原德作
松井茂男演出

第二 春色ざんげ猫 三幕七場
字田六平作並演出
食滿南北衣裳考證
又出た……怪猫

第三 上州土産百兩首 三幕六場
川村花菱作
早瀬百演出

御觀劇料

一等席 一圓八十錢（小物料共）
二等席 八十錢
椅子席 一階五十錢
（他二入場稅一錢）

どうとんぼり **角座**

# 合邦内の段

竹本相生太夫
竹澤道八
竹本織太夫
竹澤團六
豐竹駒太夫
鶴澤清二郎
鶴澤錦太夫
鶴澤寛治郎

切

人形

親合邦　吉田榮三
合邦女房　吉田小兵吉
玉手御前　吉田文五郎
奴入平　吉田玉德
俊德丸　吉田玉市
淺香姫　吉田光之助

## 攝州合邦辻

### 合邦内の段

本曲は安永二年二月（二四三三）北堀江座に上場。菅專助、若竹笛躬が合作したもので、上下二段より成り、合邦内は下卷の切に當ります。その内容は合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻腹の嫡子俊德丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊德丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊德丸に身も世もあらぬ無態の横戀慕をします淺香姫といふ美しい許嫁があるので嫉妬して俊德丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊德丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが淺香姫が訪ねてゆき手を携へて合邦の家へ行くと其處で計らずも玉手御前と落合ひます。合邦は娘の不倫の戀を怒つて我が刄にかけますと玉手は始めて眞實の底意をうち明けます。俊德丸に戀慕と見せたは計略で惡者等の爲に一命も危い俊德丸を助けやう爲であつたのです。卑しい女から玉の輿に乘せられた夫への報恩と繼子への義理立とであります。玉手御前は寅の年月揃つた女で、その臟腑の生血を絞つて飲ませると俊德丸の業病も忽ち治るといふ物語です。

（床本）

### 合邦内の段

願以此功德鉦の聲止が回向の申上百萬遍の同行中座並上下の差別なく心安居の岸はづれ合邦夫婦が志、逮夜の料理そこ〳〵に氣輕手輕の給仕こ

そ心一ぱい馳走なり講中一番はしやぎ口せんべ屋の槌右衛門杉箸片手にしやにかまへヲ、奇特によふ勸めさつしやるの見れば新しい戒名も張て有ど炬燵のやぐらやあぶりこの樣な角な字ばかりで一つも讀ねど此樣に味い事拵らへて講中を呼しやるからはどふで身内の佛でござらふ誰じや知らぬが頓生菩提と念佛に汁菜かみまぜる蓮池のはぜやの婆、イヤコレ合邦殿志の佛が有と聞た故今夜の念佛は我一と精出したでいつもとは夜食も格別麥飯にとろゝじる飛龍頭の平こんにやくの白あへではいかな亡者もずる〳〵と極樂へすべり込みしやり〳〵佛にならしやろと言も馳走の追從口主合邦取つくろひイヤモ今夜の百萬遍はちつと遁ぬ亡者への手向國を隔てくらす故命日も知らずそれで戒名も手作りで大入妙若大姉と付て置た御存じもない佛に御苦勞をかけまする即ち是が逆緣の成佛心ばかりのほんの茶漬何もなくとも御酒三献よふまいつて下されと夫が挨拶女房は目には涙のふくみ聲久しう顔も見ず死目にさへも得逢ぬむごい別せめて未來を佛にと御苦勞かけての百萬遍よふこそ參つて下さりましたサア〳〵なるもならぬも格盞でと後の盃めん〳〵にヲツト有〳〵こぼるゝと夫婦がしひぶん大分にコリヤたべ過た滿腹と膳は取れてもうつむいて辭宜さへならぬ腹鹽梅いかい御雜作御馳走と禮もそこ〳〵同行共皆打連れて立歸る後に女房は御明しの灯はかき立れど晴やらぬ子故の闇のくどきごと天にも地にも一人の子やつぱり道心者の娘で置たら非業の最期もさすまいものなま中河内一國の大名の奥樣と言はしたは親の科五年六年逢見ぬ親子病ひでも有事か苦しい死をする時に嘸や親々戀しいと思ふたであろ慕ひもせふ今はの念に引されて未來も迷ふて居るで有可愛の者やいぢらしやと身をひれ伏て泣かこつ合邦は尖り聲コレお婆ヱ、同じ事をくり返し〳〵未練のじつくはい不仕合せ故十年以來天窓は剃つても心は昔の侍氣質、一人の娘を高安殿へ腰元奉公奥方に引上られても親有共名乘らぬは斯いふ淺ましい姿故我子の肩身もすぼろふと折ふしの狀通にも必ず々親一門もない者と言ひつぬれとくどいほど言ふてやつたも娘の影で立身望と世上に言るゝが面倒さ潔白な親とは違ひ子と名の付た俊德樣に無體な戀をしかけるのみか後迄も慕ひ廻り大恩の夫を捨家出した徒女郎其儘にして有ふか早速に追人をかけ闕り殺しにがな成たで有不所存

をさげたやつ、子と思はねば不便にもいぢらしうもなけれ共弔の百萬遍は折々の貢の禮、又見ず知らずでも劍の難で死だ者は弔ふてやるが天窓の役、そなたも武士の娘だてら見苦しい泣顏と叱れば婆は猶涙可愛そふに其樣にむごたらしうは言ぬものかたわな子に不便をかけるは世上の赦し、女は誰しもあるならひ徒者の不義者のと叱るのは生てゐる中死だ後じやちつと斗り可愛やと言ふた迚佛のとがめも有まいと恨歎けば親爺も心の底は子を思ふ歎きを見せじとかぶり振りアヽイヤ〳〵我子でも惡人を不便と思ふは天道へ敵對坊主の役と一旦は弔ふたれど畜生めが其戒名引破つて仕廻ひなりとそこらの事はそなた任せ抹香もきれたら盛なりと御明しも消ぬやうに仕なりと勝手にしやれ、おりや構はぬ、まんざられんごろな他人の死だやうにも思はぬ故思はず涙がハヽヽアヽいや〳〵涙は出ねど年の科、此目がかすんで〳〵とすり赤めたる恩愛の涙隱せど悲しさは聲のくもりに現はれし夫の心汲妻は手向の水の哀れげにせめて未來の助にとくゆらす香のうす煙り思ひは富士の高嶺とも思は清見がせきとめて涙押へる鉦の音。

（床本）合邦内の段（切）

いとしん〳〵たる夜の道、戀の道には暗からね共、氣は鳥羽玉の玉手御前、俊德丸の御行方、尋ねかねつゝ人目をも、忍び兼ねたる頭冠り、包みかくせし親里も、今は心の賴みにて、馴れし故郷の門の口、立寄る後より入平が、御兩所の御行衛、爰とは聞けど奥方の、姿見るより樣子もと、戸脇にあつき藪壘、身を潛めてぞ窺ひ居る、かくとはしらで玉手御前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ樣かゝ樣と、呼ぶは慥に娘の聲、ヤアわりやまだ死なぬか、殺さりやせぬかと、立上りしが心付き、振り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞えぬはヤこれ幸ひと素知らぬ顏、かゝ樣、かゝ樣癸明けてと、叩く戸の音聞き咎め、コレ合邦殿、今こな樣何とぞ云ふてか、イヤ何共云やせぬそりや空耳であるぞいの。イヽヤ、空耳かは知らね共、ちらりと聞えた娘の聲ハテ合點の行かぬと立上がる、さう仰有るはかゝ樣か、ちやつと明けてくださんせ、辻でござんす戻りましたと、聞いて悔り、ヤア〳〵、戻つたとは夢ではないか、まめであつたか嬉しやと、かけ出る裾を取つて引とめ、ヤイ〳〵〳〵狼狽者、肌はふれてもふれいでも、我子に不義をし

かけた畜生、侍の身で高安殿が、助けおかしやる樣なければ、何の今迄存生へてうか〳〵爰へ何にしにこうぞい、アヽ隱すより顯はるゝはなし親はないと云はしてもある事知つて娘が手から度々の合力金、二人が命を養ふたは、皆高安殿の御厚恩。其夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘譬へ無事で戻つたとて、門ばたも踏まされうか、元來娘は斬られて死んだが、今もの言ふたが娘なれや、夫こそ幽靈、そなた氣味が惡うはないか、因緣の深い程、死人になれば恐いもの、必らず門の戸明けまいぞと云ふに女房は、イヤ〳〵〳〵幽靈は愚か、狐狸の化けたのでもま一度見たい娘が顏、もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せいとし可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一ト目見たいと振切るを、猶引とめて、ハテ扨て惡い合點じやわいの、狐狸か幽靈なればまだしも、もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯、以前は刀を差した役、親の手にかけ殺さにやならぬ、それがいやさに留めるのぢやと泣かねど親の慈悲心を聞く子や妻は內と外、顏と顏とは隔たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠ぞ哀れなる、娘は涙押し拭ひ、門の戸口に口を寄せ、とゝ樣の腹立、お憎しみは御尤これには段々言譯あれど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明けて下さんせと、泣く〳〵願へば母親は、アレ聞いてか合邦殿、言譯があるといのマア聞いてやつて下さんせ、ハテ娘と思へば義理もかける、幽靈を內へ入れるに、誰に遠慮もあるまいぞへ、アいかさまのう、此世をはなれた者なれば、世間を憚る事もないそんなら早う呼込んでソレ茶漬でも手向てやりや可愛や立寄るところはなし、幽靈も嘸ぞひだるかろと、身を背けるは泣く百倍、母は悅び門口の、疾しやおそしと開くる間も、おなつかしやなつかしやと。縋る娘の顏形、前後見つ肌にこを入れても矢張りほんの娘嬉しやまめでゐたかいの。然うとは知らいで逆樣事、あたいま〳〵しい百萬遍、弔ひした夜に無事な顏、ひよつと夢ではあるまいかと、抱きしめ〳〵嬉し泣き父もほどふる娘が顏、見たさに思はず立寄れど、以前の詞と世の義理を、思へばちやつと飛退いて、手持惡いぞいぢらしき、母は漸う心を鎭め、世間の噂には、そなたは、アノ俊德樣とやらに戀をして、館を拔けて出やつたの、イヤ不義ぢやのと惡ふ云へど、そなたに限り、よもや〳〵さう云ふ事はあるま

いの、嘘であろ〳〵。嘘か〳〵と箸持つてくゝめる様な母の慈悲。面はゆげなる玉手御前、母さんのお詞なれど、いかなる過去の因縁やら、俊德様の御事はねた間も忘れず戀こがれ思ひあまつて打付にいふても親子の道を立て、つれない返事かたい程猶いやまさる戀の淵いつそ沈まばどこ迄もと後をしたふて徒はだし、あしの浦々難波がた身をつくしたる心根を不便と思ふて俱々に俊德様の行衛を尋ね女夫にして下さんすが親のおじひと手を合せ拜みまはれば母親も今更あきれ我子の顏たゞ打守るばかりなり。父はとかふの詞なく納戸の内より昔の一腰引提出、ヤイ畜生め、おのれにはまだ咄さねど、もとおれが親は靑砥左衛門藤綱といふてナ鎌倉の最明寺時頼公に見出しにあふて天下の政道を預り武士の鑑と言はれた人、おれが代になつても親のかげ大名の數には入たれど、今の相模入道殿の世に成て佞人共に讒言しられ浪人して廿餘年世を見限つての捨坊子此形になつてもナ親の讓りの廉直を立通した合邦が子に、よふも〳〵おのれがやうな女の道も人の道もむちやくちやな娘を持たと思へば無念で身節も碎けるわい、又高安殿が今日迄うぬを助けて置つしやる御心底を推量するに、もとおのれは先奥方の腰元、後の奥方に引上ふと有た時、強て辭退しおつたを心の正直懇望で無理やりに奥方になり、ア、手をかけず奥様とも言さずば此仕儀にも及ぶまい、殺さにやならぬやうになつたも皆我業とお身の上を返り見て親への義理に助けて置しやるをヱ有がたい恥かしいと、思ふ心がけしほどでも有なら譬へどれ程惚ておつても思ひ切るに切られぬと云ふ事はないわい、それになんじや其ざまになつてもまだ俊德様と女夫になりたい親の慈悲に尋てくれとはド、どのほうげたでぬかした、ヱあつちから義理立て助け置つしやる程生けて置てはこつちも義理が立ぬ覺悟せいぶち放すと早拔きかける刀の鯉口、母は取り付コレ合邦殿コリヤ了簡が違ふた〳〵おじひで助けて下さる娘お志しを無駄にして殺して義理が立ますかハテ此上は隨分と意見して俊德様の事思ひ切らし命の代りに尼法師いかなる科の囚人も助るは衣の德浮世を捨れば死だも同然どこへの義理も立道理と奥へ指ざし様々と宥めすかして母親は我子の膝に膝すり寄せ聞やる通りの様子なればどの様に思やつてもそなたの戀は叶はぬ程にふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼

になつてたも、十九や二十の年ばいで器量發明勝れた娘、尼になれと勸めるはどんな心で有ぞいの、助たいばつかりに花の盛りを捨させてかゝれ迚しも黑髮の百筋千筋と撫しもの剃ねばならぬ此仕儀は何の因果と許りにて縋り付て泣居たる娘は飛退き顏色かへェ、譯もない事いはしやんすなわしや尼に成事いやじや〳〵折角艷よふ梳き込だ此髮がどふむごたらしう剃れるもの、今迄の屋敷風はもう取置て是からは色町風隨分はでに身を持て俊德樣に逢たらばあつちからも惚てもらふ氣、けがにも假にも尼の坊子のと言ひ出しても下さんすなと、けんもほろゝに取付ず、そふぬかしやモウ勘忍がと父が身構へ母親はヲ、道理でござんす〳〵腹の立は尤ぢやが、モウ半時かしひて一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見せませう、夫婦に成て長の年月たつた一度のわしが願ひ聞屆けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行く父親母はいぢばる娘の手引立〳〵むりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず淺香姫、一間の内より俊德の御手を引て忍び出今の樣子を聞に付モウ暫くも此内にお前はどふも置きまされぬ何國へなりとお供せうと、手を引立れば俊德丸、我業滿てず母上に斯迄思はれ參らするも身の罪障とは言乍ら館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上に、かゝるけやけき姿をばお目にかけなば母上の愛着心は切もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上に入平夫婦も尋ね來ば召連れ立退んと宣ふ聲を聞取門口アゝいや私めは先刻より始終の樣子承はる、此所に御座有事里人の噂に聞ばもし敵方へもれては大事、一刻も早く御供せんと、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフなつかしや俊德樣お前に逢はふ許りにいくせの苦勞物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見たわいなとすがり賜へば身をすりのけ、ヘェ、情ない母上樣館にても申すごとく同氏さへも娶らぬは君子の戒めまして親子の中々に戀の色のとか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深い俊德にまだ〳〵罪を重ねよとか、見るめいぶせき此癩病兩眼しひて淺ましき姿はお目にかゝらぬかや是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へと涙と俱に恨むれどホゝ、オゝ、愚な事をおつしやります、其お姿も私が業むさいともうるさいとも何の思はふ思やせぬ自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほどいや增戀の種と

なり、一倍いとしうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業とおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住吉で神酒と僞りコレ此鮑で勸めた酒は秘法の毒酒、癩病發する奇藥の力、中に隔をしかけの銚子、私が呑だは常の酒、お前のお顏を見にくうして淺香姫にあいそつかさせ我身の戀を叶よふ爲、前世の惡業消滅と家出有しはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中も君が筐と此盃 肌身放さず抱しめていつか鮑の片思ひ、つれないわいなと御膝に身を投伏てくどき泣、樣子を聞て俊德丸無念と思せど義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運の御落涙、姫はいつそ涙も出ず腹立紛れ取て突退けヱ、聞ば聞く程餘りじやわいな〳〵玉をのべたお委をよふあの樣に仕やつたなふ、母御の身として子に戀慕、人間とは思はねど道ならぬ事も程がある、サア元のお顏にして返しやと恨み餘つてはしたなさ玉手はすつゝと立上りヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊德樣いづくへなりと連退て戀の一念通さで置ふか邪魔しやつたら蹴殺すと、飛かゝつて俊德の御手を取て引立るアヽラ穢らはしと、ふり切るを放れじやらじと追廻し、さゝへる姫を踏のけ蹴退けいかる目元は薄紅梅逆立つ髮は靑柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかねてかけ出る合邦娘が髻引摑みぐつと差込氷の切先、あつと魂消る聲に驚り戸をめり〳〵かけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけしかと御涙、娘をかゝへる母親は心からとは言ひながらヲヽ術なかろ苦しかろと歎けば今更人々も涙〳〵を添にける。合邦は怒りの顏色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナヽヽ、何ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門樣や俊德樣御夫婦へ心の義理が立まいがな、此樣な念の入た大惡人をまだおのりや子じやと思ふか、おりやもふ〳〵憎ふて〳〵どふもかうもたまらぬわい十年以來蚤一疋殺さぬ手で現在の子を殺すも浮世の義理とは言ひながら、是が坊主の有ふ事かい〳〵コリヤヤイコリヤおのれ計りか此親まで佛の敎を背かして無限地獄の釜こげにようしをつたなア魔王めと扶る拳を手負は押へヲヽ道理でござんす道理じや〳〵憎い筈じやが是には深い樣子のある事、物語るうち此刀必ず拔て下さんすなと苦しき息をほつとつぎ樣子といふは外でもなく外戚腹の次郎丸樣、年かさに生れながら後に生れ

た俊德樣に家督を繼すを無念に思ひ壺井平馬と心を合し、御世繼の俊德樣殺さふといふかねての巧み推量ばかりか委しい樣子立聞してなむ玉寶義理ある中の御子と言ひ元は主人の若殿樣、殺させては道立たず、此上は俊德樣御家督さへお繼なくば次郎丸樣の惡心も自然と止でお命に別條ないと思案を極め心にもない不義徒いふもうるさや穢らはしい妹春のかためと毒酒をすゝめ、難病に苦しめたはお命助けふばかりの手便、戀でないとの言譯は身をも放さぬコレ此盃繼母の心子は知らぬ片思ひといふ心の誓ひ、繼母繼子の義は立てもあるまじ我夫通俊樣根が賤しい女故、見損ふた徒者とおさげしみを受るのが黄泉の障りになるはいのと、いへど合邦嘲笑ひ、ハヽヽヽ夫程しれた次郎丸が惡事なぜ通俊樣へ告げぬぞい、たつた一口言ひさへすりや癩病にする事も不義者にもならぬわい、口利巧に言廻した迚今になつて、そんなくらい言譯くふ樣な親じやないわいイヤ〳〵そりやとゝ樣の御了簡違ひ、其樣子を夫へ告なば道理正しい左衛門樣お怒りあつて次郎丸樣切腹かお手討は知れた事、次郎丸樣も通俊樣も私が爲には同じ繼子、義理ある中にかはりはない惡人なれど殺しては先立しやんした母御前が草葉の蔭でも嘸や歎、隔た中故訴人して殺したかと思はれては世間も立ず、通俊樣もお子の事、何の心よからふぞ、あなたこなたを思ひやり、繼子二人の命をば我身一つに引受て不義者と言はれ惡人になつて身を果すが繼子大切夫の御恩せめて報ずる百歩一と言譯聞て人々は扨はそうかと疑ひの晴る程猶父親はムウコリヤ娘其心でなぜに又俊德樣の後追て家出したが合點がいかぬはい、ヲヽ尤なお咎なれど何國迄も行衛を尋ねあなたのお目に懸らねばいたはしやあの癩病御本腹はござんせぬと、聞て入平不審顏、フウ何とおつしやるお前樣がお傍に付てござれば御本腹なさるゝとは、さればの事、典藥法眼に樣子を打明毒酒の調合賴む折から本腹の治法委しく尋ねしに、胎内より受たる癩病ならず毒にて發する病なれば寅の年、寅の月、寅の日寅の刻に誕生したる女の肝の臟の生血を取り毒酒を盛たる器にて病人に與へる時は即座に本腹疑ひなしと聞た時の其嬉しさ、それで〳〵此盃身に添持て御行衛尋ねさがす心の割符とゝ樣何と疑ひは晴ましてムんすかヘヲイヤヤ〳〵〳〵そんなら何かそちが生れ月日が妙藥に合た故一旦は癩病に

してお命助け、又身を捨て本腹さそふと夫で毒酒を進ぜたな、アイ、ヘエ出かしおつた出かした〳〵娘、コリヤやい娘モヽヽ何にも言はぬ堪忍してくれ〳〵日本は扨置、唐にも天竺にも今一人とくらべる人もない貞女を畜生の惡人のと憎て口いふ計りか親の手にかけむごい最期もコヽ此おれがぐどんなからぢや、あほうなからぢや、赦してくれとどふと居て悔み涙ぞ道理なる始終を聞て俊德丸探り寄て繼母の手を取押戴き〳〵なさぬ中の義を重んじ御身を捨ての御慈愛、誠の親共命の親共言ふにもつきぬ御厚恩身を千百に碎く共何と報じつくすべき有難や忝けなやと頭を疊に付け賜へば其お心とは露知らず勿體ない道知らずとさげすんだのが恐ろしいお赦しなされて下さりませと兩手を合す、姫の詫、遊女の鑑とも言るゝお身に惡名付かゝる御最後いたはしやと入平も悲歎の涙、母は正體涙にくれ、ほんにこの子が生れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、世間へ沙汰をせぬ物と世の教をば大事ぞと夫婦親子の其外は、犬猫にさへ隱したに義理にせまれば我と我身を責はたる無常の虎ひよんな月日に生れたは持て生れた不運かと歎けば道理と一座の涙、あふ坂增井の名水に龍骨車かけし如くなり、手負は顏をふり上げてサア〳〵とゝ樣コレ此鳩尾を切りさいて肝の臟の生血を取此鮑で早ふ〳〵と氣をいる娘、エヽ憎いと思ふた張り合ひなりやこそ切も突もなつたもので今では眞底可愛い娘をどふマアそれが、むごたらしいヤ若役じや入平殿とやら大儀ながらたのみます、是は又迷惑千萬、主人の介抱お世話のお禮どんな御用も相勤ふが御主人同然の玉手樣どこへ刄が當られませう、こればつかりは御免〳〵エヽ未練な用捨。もふ人頼みには及ばぬと、懷劍逆手に取直せばマヽヽ待てくれ娘とても生ぬそちが命、臨終正念未來成佛佛力頼む百萬遍此人數でくる珠數の輪の中で往生せいと取々廣げる珠數の輪の中に玉手は氣丈の身構へ俊德丸を膝元へ右に懷劍左に盃、外には爺の親粒が、導師の役と鉦撞木母は涙の目も明かず宵は死だと思ひ子が回向の爲の百萬遍、今又無事なと悅んだも露と消行く勤めの念佛、南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵〳〵內には難なく切さく鳩尾自身に血汐うけたる盃、差付る手もわな〳〵〳〵、俊德丸は押戴き母の賜物天地にも餘るばかりの御芳志と只一口に呑乾賜へば不思議や忽ち兩眼開け面色手足もまたゝく中

昔の姿に歸り咲、花の顏見る手負苦しき片頰に笑ひ顏ヤア御本腹かと一座の悅び早斷末魔の四苦八苦、鉦も早めて責念佛なまいだ〳〵〳〵〳〵願以此功德平等に死骸に取付き縋り付、悲しみ涙忝け涙、庭に波打つばかりなり、歎きの中に母親は頭の雪をうちはらひ、娘が菩提の尼衣、俊德君も涙をとゞめ廣大無邊繼母の恩せめて少しは報ずる爲世の後は此邊に一宇の寺院を建立し母の尼公を住侶とせん繼母は貞女の鑑とも曇らぬ心は清み江に月を宿せし操を直ぐに月光寺と號くべしと仰は今も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や殘るらん、父は常々勸進の自力他力に此佛體建立して我住家を其儘一つの辻堂に營むも又平等利益、東門中心極樂へ娘を往生なし賜へと願ふ心は後世の爲、現世の名殘數々は百八煩惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀨と僅に殘る盃の逆樣事も善知識佛法最初の天王寺西門通り一筋に玉手の水や合邦が辻と古跡をとゞめけり。

# 新生新派奮鬪劇

三月一日初日
毎日四時半開幕

第一 村と兵隊 一幕
吉屋信子作
阿木翁助脚色
八田元夫演出

第二 鶴亀 五景
里見弴原作
久保田万太郎脚色並演出

第三 小指 四場
堤千代作
川口松太郎脚色
久保田万太郎演出

第四 築地明石町 四幕
川口松太郎作並演出

御觀劇料

櫻席 六十錢
菊席 八十錢
三等席 一圓三十錢
二等席 一圓八十錢
一等席 三圓八十錢
（他に入場税一錢）

大阪歌舞伎座

# 八百屋お七火見櫓の段

（竹本源太夫
豐竹文太夫
豐竹富太夫
竹本隅太夫
竹本若太夫
竹本松島名太夫
竹本越前太夫
竹澤吉彌
野澤八三郎
野澤友造
鶴澤綱延
鶴澤勝芳
鶴澤道八

人形

八百屋お七　桐竹紋十郎
下女お杉　吉田文昇
丁稚彌作　桐竹紋枝
武兵衛　吉田多三郎

## 伊達娘戀緋鹿子（だてむすめこひのひがのこ）

### 火見櫓の段

西鶴の「好色五人女」（貞享三年〔一六八六〕）にまで扱はれた戀故に放火の大罪を犯した八百屋お七の實話を劇化した紀海音作「八百屋お七戀緋櫻」（享保十七年正月〔一七三九〕豐竹座上演）の增補作「潤色江戸紫」（延享元年四月〔一七四〇〕豐竹座上演）作者爲永太郎兵衛（千蝶）他）を更に飜案改作したのが本曲「伊達娘戀緋鹿子」全八段で、作者は菅專助松田和吉、若竹笛躬。安永二年四月（一七七三）北堀江座に上場、この作ではお七は吉三をして天國の寶劍を主君に屆けさせ度い一念で火刑をも厭はずに夜半に火の見櫓の半鐘を打つて市中の門を開かせる——放火の代りに櫓の半鐘を打つ趣向に改めた。後には歌舞伎のお七人形振りともなつた色彩感の優れた一場です。

（床本）火見櫓の段

跡にお七は心も空、廿三夜の月出ぬ中と、體は爰に魂は、奥と表に目配り、餘所の歎きも白雪に、冴え行く遠寺の鐘かう〳〵、響き渡れば、ヤア彼鐘は早九つ、夜中限りに江戸の門々を閉めては、大切な用ある人も往來ならぬ嚴しいお觸れ、假令劍が手に入つても今夜中に屆ける事が叶はねば、吉三樣は矢張切腹。ハア悲しや是りや何とせう如何せうと立つたり居たり氣はそゞろ、更け行く空の怨しく、鐘鳴る方を睨み付け、拳を握り齒をかみしめ、只うつとりと立つたりしが、ふつと氣の付く表の火の見、ヲ、然うじや、アノ火の見

の半鐘を打てば、出火と心得、町々の門を開くは定、思ひのまゝに劍を屆け、夫の命助けいで置かうか鐘を打つたる此身の科、町々小路を引廻され、燒殺されても男故、少しも厭はぬ大事無い、思ふ男に別れては、所詮生きては居ぬ體、炭にもなれ灰ともなれと、女心の一筋に、帶引締めて裾引上げ表に駈け出で、四辻に咎むる人も嵐に凍て、雪は凍りて踏滑る、梯子は即ち劍の山、登る心は三惡道の通ひ道、杉は難無く奥の間より、劍を盗んで逃げ來る跡、ヤイ大盗人めと駈來る武兵衛、引き抱へ拷ぎ取る劍、遣らじと縋るを蹴飛ばす、どつこい然うはと取付く攝作。是や何ひろぐと太左衛門、引擦りつくるその手を直ぐに、腕搦みにこりや〳〵〳〵、彼處は見下す雪の屋根其儘三途の瓦葺、睨む地獄の鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻りくる〳〵〳〵〳〵と、下には四人が挑む中、お七は難無く火の見の上撞木追取りぢやんぢやん〳〵、音より間も無く爰彼處、一度に打出す警鐘の、響きに連れて開く門々、嫌はれた意趣晴し、引縛つて訴人すると、お杉を蹴飛ばし上り來る、梯子を下より打返せば、武兵衛は大地へ眞逆樣、持つたる脇差取落すを、杉は追取り吉三が方、駈け行く跡を追掛ける、太左が首筋是はいなと、擔いで投げ込む用水桶、腰骨折つて蠢く武兵衛お七も飛んで遠近の、人の噂と、なりにけり。


# 新興藝演部公演

三月一日初日

涙花座初登場講談界の巨頭
大島伯鶴

五人の笑擊兵

新舞踊

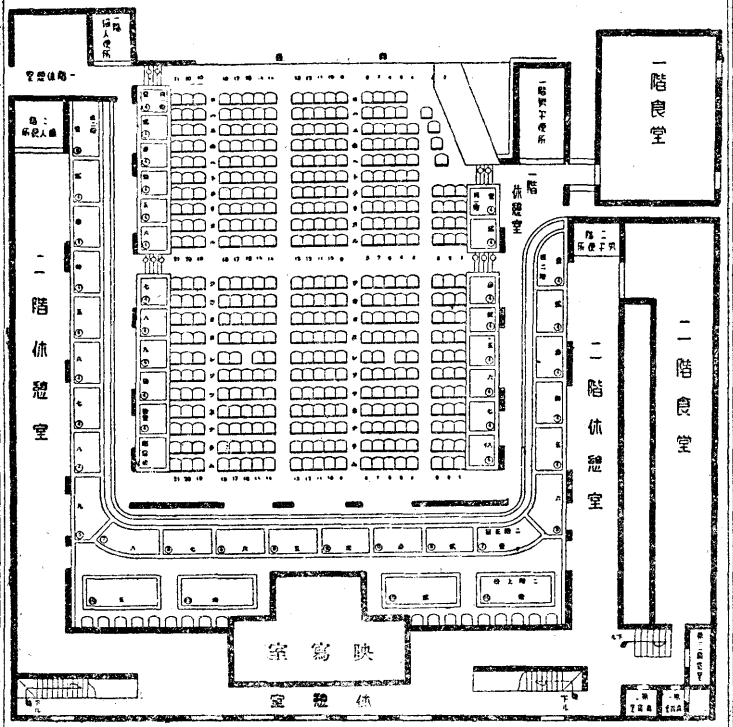
都々逸扇歌

新興ショウ
ミミー宮島

—新興特選萬才—
（ノキ）（ラ）（ボ）（ル）（逸文）
（壽）（々）（子）（子）（芳豐）
（春綾）（多）（樓子）（貞豐）
日佐丸
ラツパ
郎惠
郎若
奴香

どうとんぼり
涙花座

# 文樂座御席場御案内




**御觀覽席**は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

**前賣切符**・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は**南四七壹壹番**で御座ゐます

**切符賣場**・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

# 觀賞おぼえ

昭和十五年三月　日

雪精化粧の白鷺

太平記忠臣講釋

おはん長右衛門　桂川連理柵

日吉丸稚櫻

壽式三番叟

攝州合邦辻

伊達娘戀緋鹿子

豊田書房
(3261) 1589

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

**當文樂座は** 既に皆樣御承知の通り我大阪に於ける鄕土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でムゐます。

**文樂座人形淨瑠璃は** 當に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。從つて開場毎にこの大使命が全う出來ますやう、皆樣の御期待に反かぬ樣、皆樣に御滿足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客樣の御聲として承りたく存じます。

**御携帶品は** 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

**貴重品は** 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

**お煙草は** 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

**お食事は** 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

**賣店は** 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

**お化粧とお手洗** 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

**場内にて** 寫眞撮影は絕對にお斷り致します。

**御休憩の間は** 一階西側に給茶處と休憩所の設備が御座居ます

**お出口は** 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

**案内人は** 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般從業員に不行屆の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

**出演者** 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

## ◇皆樣へ御案内◇

當座は此度皆樣へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上げる事に致しました。御一報次第參上、どうぞ御利用下さいませ。

**專用電話南㊱三七八八番**

松竹株式會社

**文樂座**

支配人 下村清次郎

昭和十五年二月廿九日印刷
昭和十五年三月一日發行
發行所 松竹株式會社大阪支店 大阪市南區久左衛門町八番地
發行人 鳥江鎭也 大阪市南區久左衛門町八 松竹株式會社大阪支店内
編輯兼 印刷所 永井日英堂印刷所 大阪市西區土佐堀通一丁目十二
一部 金二十錢

# 文樂座南一食堂

賜命下御に前幕一は用御の事食御
すまい座御で利便御極至ばれは

御宴會にも
御家族連にも

大阪四ツ橋

# 南一温泉料理

電話南(75)
一三二四番
一三二三番
一三三二番
一三三一番
七〇一番